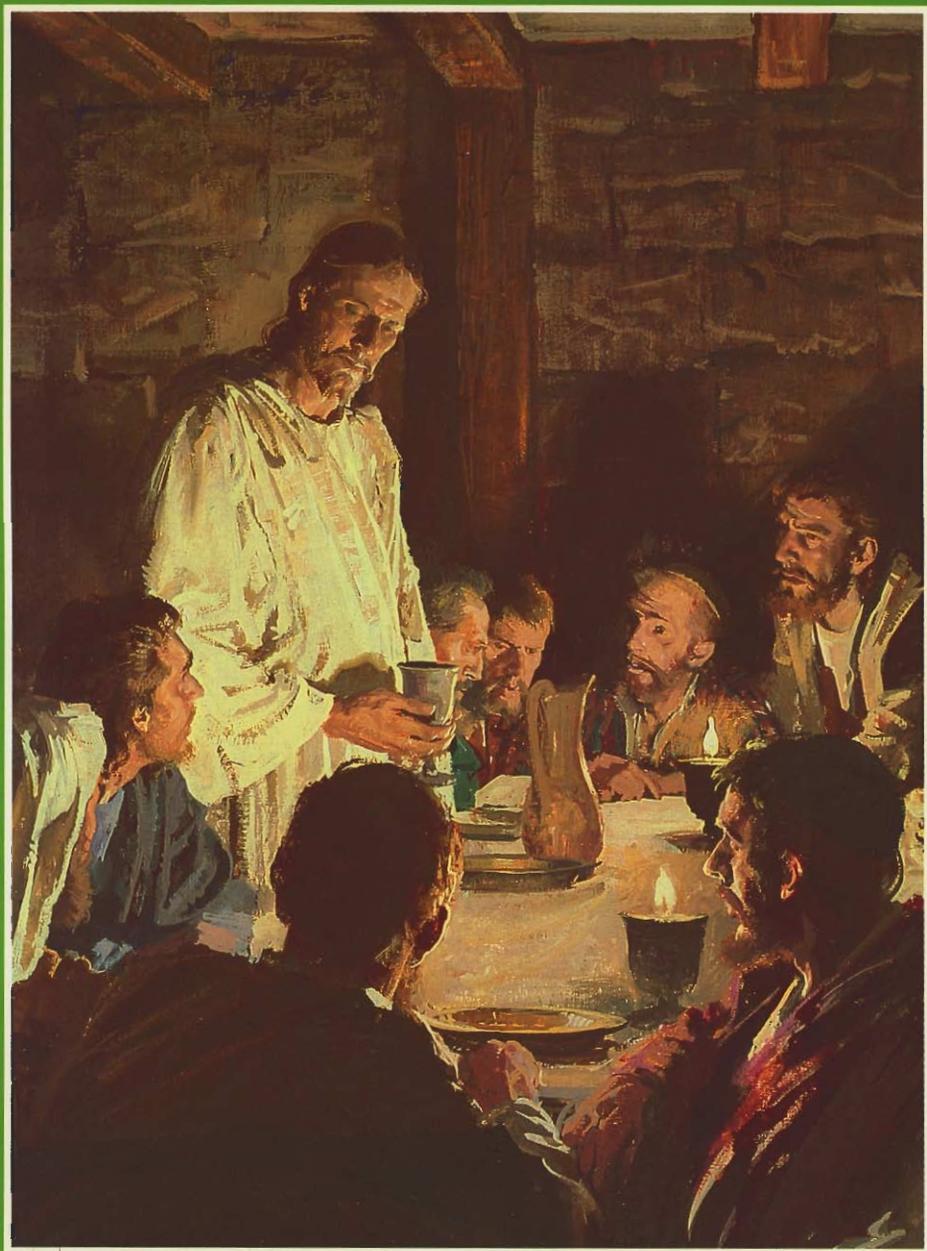
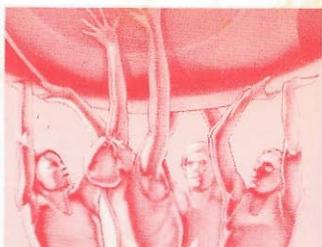


聖徒の道 5 1984





末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スベンサー・W・キンボール
 マリオン・G・ロムニー
 ゴードン・B・ヘンクレー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
 ハワード・W・ハンター
 トーマス・S・モンソン
 ボイド・K・パッカー
 マービン・J・アシュトン
 ブルース・R・マッコスキー
 L・トム・ペリー
 デビッド・B・ヘイト
 ジェームズ・E・ファウスト
 ニール・A・マックスウェル

顧問

M・ラッセル・バラード
 ローレン・C・ダン
 レックス・D・ピネガー
 チャールズ・A・ディディエ
 ジョージ・P・リー

編集長

M・ラッセル・バラード

国際機関誌

編集主幹：
 ラリー・A・ヒラー
 編集副主幹：
 デビッド・ミッチェル
 子供の頁編集：
 ボニー・ソーンダース
 レイアウト・デザイン：
 マイケル・カワサキ

もくじ

「それではキリストといわれるイエスは、…ゴードン・B・ヘンクレー…… 1
 どうしたらよいか」
 それほど神は世を愛してくださった……スベンサー・W・キンボール…… 7
 系図と神殿事業……ジョージ・D・ダラント……12
 「お願いだ、神殿の儀式をしておくれ」……テリー・リン・フィッシャー……16
 できますとも……イレイン・ティーズデル……18
 「それが私がいただくものですか」……チェリー・G・ウルフ……19
 新会員の皆さんへ……ローレン・C・ダン……20
 質疑応答……ディーン・ジャーマン……28
 ホテルの入口で見た謙遜さ……フランク・L・クレイブ……32
 勝利……キース・エドワーズ……34
 イエスの歩まれたところを……ハロルド・B・リー……38
 クレアとタレントショー……ポーラ・デポロ……44
 天上の大会議……49
 おもちゃぼこ……52
 私はこうしています 2 (欠点にとらわれず長所を見いだすには)……54
 ローカルページ……57

■表紙：「私を記念してこれを行ないなさい」(ハリー・アンダーソン画)
 ©Pacific Press Publishing Association, used by permission.

1984年5月号 聖徒の道 第28巻第5号
 発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
 東京都港区南麻布 5-10-30
 電話 03-440-2351

印刷所 株式会社 精興社
 定価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)
 半年予約1,100円(送料共)
 1部180円, 大会号350円

International Magazine PBMA045AJA Printed in Tokyo, Japan.
 ©1984 by the Corporation of the President of the Church of Jesus
 Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.

●定期購読は、「聖徒の道予約申し込み用紙」でお申し込みになるか、または現金書留か振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 渋谷ブックセンター 振替口座番号/東京0-41512)にてご送金いただければ、直接郵送致します。注：お届け先の変更がありましたら、早急に渋谷ブックセンターにご連絡下さい。●「聖徒の道」のご注文・お支払いなどの連絡先……〒150 東京都渋谷区桜丘町28-8/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部渋谷ブックセンター/☎03-464-1617(代)

「それではキリストといわれる イエスは、どうしたらよいか」

第二副管長

ゴードン・B・ヒンクレー

この復活祭の季節にあたり、私たちの祝
う「復活」をされた方すなわち奇跡
の人、私たちの主、救い主イエス・キリス
トについて少し述べてみたいと思います。
主は病人を癒し、死人をよみがえらせ、足
なえを歩かせ、盲人の目を開けるといふ業
をされました。しかし、キリストご自身と
いう奇跡に匹敵する奇跡はほかにありませ
ん。私たちは、ジェット機や長距離ミサイ
ルを誇り、しかもそれがすばらしいとされ
る虚飾と権力の世界に住んでいます。そ
の誇り、高慢さは、シーザーやジンギスカ
ン、ナポレオンやヒトラーの時代に不幸を
もたらしたあの高慢さと同じものです。こ
うした世の中であって、以下のことを認め
るのは容易なことではありません。すなわ
ち、

ベツレヘムの村のかいばおけの中で生ま
れた幼な子、

ナザレの大工として育てられた少年、
制圧された国の一市民、

この世での行動半径がせいぜい240キロ
程度の人、

学歴もなく、大きな説教壇から話をする
こともなかった人、

家もなく、お金も持たずに歩いて旅を続
けた人、

その人がまぎれもなく天と地とその中
にある万物を造りたもうた神であると認める
ことです。

多くの人々は、その方こそ私たちの救い
主であり、その方のみ名によってのみ私た
ちが救われるということを認めようとはし
ません。また、その方が今までに例のない
永遠の事柄、神聖な事柄に光と理解力を与
えてくださったことも認めようとしません。
さらに、そのみ教えが無数の人々の行ない
に影響を及ぼすだけでなく、人を保護し権

「それではキリストといわれる
イエスは、どうしたらよいか」



威を与える政治体制や教育と文化を向上させる社会真理にも靈感を与え得るということをなかなか認めようとはしないのです。もちろん、主の比類ない模範が世界のすべての善と平和の偉大な力となるということでもあります。

今から約2千年前にポンテオ・ピラトが尋ねたことを、ここでもう一度くり返したいと思います。「それではキリストといわれるイエスは、どうしたらよいか。」(マタイ27:22)確かに、このことを自分自身に問いかけてみる必要があります。キリストといわれるイエスについて、私たちは何をしたらよいのでしょうか。そのみ教えについてはどうでしょうか。どうしたらそれを私たちの生活に欠かせないものとすることができるでしょうか。このことについて少し考えてみたいと思います。

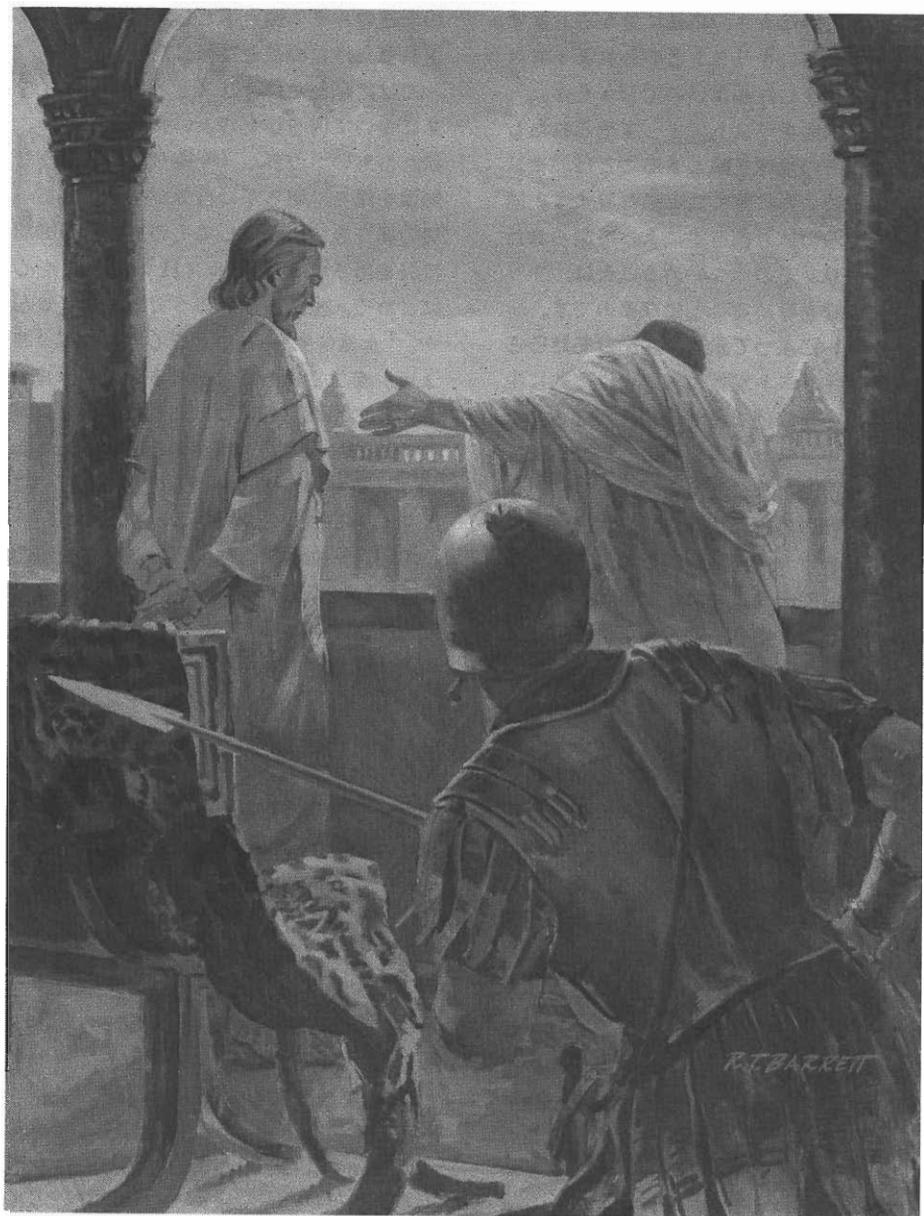
キリストは与えることの模範です 御父は御子を与えてくださり、御子はご自分の命を私たちに与えてくださいました。与えることなくして真のクリスチャンとしての精神はなく、犠牲なくして真の礼拝はないのです。

私はアイダホ州のあるステーキ部大会で聞いた経験談を思い出します。その地域のある農家の人が必要に迫られて増築の契約をしていました。3、4日後、そこの父親が建築業者に会い、こう言いました。「契約を取り消したいのですが、よろしいでしょうか。昨晚、監督から息子のジョンに伝道の話があったのです。増築はしばらく見合わせることにします。」これに対して業者の返事はこうでした。「息子さんが伝道に行か

れるんですね。任せてください。戻って来たときに入れるようにこちらで何とかしましょう。」これこそクリスチャンの精神なのです。福音を説くために息子を伝道に送り出す家族、そしてその家族の問題を解決する手助けをしてくれる友人たち。

それでは、実際にキリストといわれるイエスについて私たちは何をすればよいのでしょうか。困っている人々を助け、主の永遠の真理の目的を宣べ伝えるために自己を捧げ、財産を捧げ、思いと体力を捧げるのです。これこそ真のクリスチャン精神の真髄なのです。

キリストは創造主です 救い主のことを考えると、必ずヨハネの言葉が浮かんできます。「初め^{ことば}に言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった。すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。この言に命があった。そしてこの命は人の光であった。」(ヨハネ1:1-4)これはすべての良きもの、美しきものを創造された方について書かれたものです。私は青空にそびえ立つ^{すいこう}荘厳な山々を見ては天と地の創造主イエスのことを思いました。また太平洋の島の浜辺に立って、金色に輝く太陽が白やピンク、むらさきの雲に囲まれながら昇ってくる劇的な夜明けを目のあたりにして、イエスに思いをはせました。イエスの言葉によってすべてのものが造られ、造られたものの中でイエスの手によらないものは何もないのです。私は、きれいな目をした、汚れを知らないかわいい子供たちを



ロバート・T・バレット画

「それではキリストといわれる
イエスは、どうしたらよいか」



見ては創造の偉大さ、奇跡に驚かされます。
では、私たちはキリストといわれるイエス
について何をしたらよいのでしょうか。

この地球はキリストによって造られたもの
です。その地球を醜くすることは、キリス
トのみこころに背くこととなります。同
様に私たちの体も創造主によって創られた
ものであり、その体を辱めることは、キリス
トご自身を辱めることになるのです。

**キリストによって永遠の生命がもたらさ
れます** キリストが世に来て人々と共に生
活され、命を捧げて復活の初穂となられた
ように、キリストの贖いによってすべての
人が不死不滅となります。死は避けられま
せんが、死のとげは抜かれ、墓は勝利にの
まれてしまうのです。「わたしはよみがえり
であり、命である。わたしを信じる者は、
たとえ死んでも生きる。また、生きていて、
わたしを信じる者は、いつまでも死なな
い。」(ヨハネ11:25-26)

ある若者の棺の前に立ったときのことを
思い出します。彼は、輝かしい将来を約束
されていました。高校生の頃の彼はスポー
ツ選手で、大学時代は優秀な学生でした。
また、だれからも慕われる立派な青年で
した。その後彼は伝道に出ました。彼と同僚
の宣教師がハイウエーを走っていたところ
へ、反対方向から来た1台の車が車線を越
えて彼らの車に衝突したのです。彼は1時
間後に病院で亡くなりました。説教壇の所
に立って彼の父親、母親の顔を見た私は、
心の中にそれまで感じたことのない強い
確信を得ました。私は、彼の棺に目をや
りながら、この若者は死んだのではなく主

の永遠のみ業の働き手として別の場所に移
されただけなのだと確信したのです。

では、私たちはキリストといわれるイエ
スについて何をしたらよいのでしょうか。
私たちもいつの日か「今持っているような
知識を保ち、明らかに自分が持っている一
切の罪を思いめぐらしてそのまま神の御前
に引き出される」(アルマ11:43)ことを心
にとめて、生活していこうではありません
か。「永遠に生きる」ことを心にとめて「き
ょう」を生きようではありませんか。また、
この世の生活で身につける英知、美、真理、
善の原則は、どれも復活のときにもによ
みがえるという確信を持って生活してい
こうではありませんか。

**キリストは慈悲と愛、そして特に赦しの
すばらしい模範です** 「見よ、世の罪を取り
除く神の小羊。」(ヨハネ1:29)キリス
トのみ教えやその比類ない模範がなかつた
としたら、私たちの生活はどんなに味気ない
乏しいものとなるのでしょうか。もう一方
の頬を向けること、2マイル行く精神、戻
って来た放蕩息子の教訓、その他数多くの
すばらしい教えは、幾世代にもわたって人間
の無情さの中から親切心と慈愛を引き出す
媒体となってきました。

キリストが忘れ去られている所では、残
虐さが人々を支配しています。反対にキリス
トが受け入れられ、み教えが守られている
所では、親切と寛容が人々を治めています。

では、キリストといわれるイエスについて
私たちは何をすればよいのでしょうか。「人
よ、彼はさきによい事のなんであるかをあ
なたに告げられた。主のあなたに求められ



ることは、ただ公義をおこない、いつくしみを愛し、へりくだってあなたの神と共に歩むことではないか。」(ミカ6：8)

「この故にわれ汝らに告ぐ、汝ら互いに赦し合うべきなり。そは、人その兄弟の過ちを赦さざれば、その人主の前に罪に値する故にして、そは更に大いなる罪なお彼に在ればなり。」(教義と聖約64：9)

キリストは平和を与えてくださいます

私は何年前にヨーロッパにいたときのことを思い出します。当時、大都市の通りは戦車が往来し、学生たちは機関銃の恐怖にさらされていました。私は12月のある日、スイスのベルンの駅に立っていました。午前11時に、スイス中の教会の鐘が鳴り出し、鐘が鳴り終わるとすべての車が止まったのです。ハイウエーを走っている車もバスも電車もみな止まりました。大きなほら穴のような駅もすっかり静まりかえっていました。私はドアの向こうの広場に目をやりました。向かい側のホテルで働いている人人も帽子を取って足場の上に立っていました。自動車もみな止まり、男性も女性も子供たちも皆降りて、かぶっていたものを取って頭を下げていました。この3分間の敬虔な沈黙が終わると、食料品や衣服、薬などを積み込んだトラックの一団がジュネーブやベルン、バーゼル、チューリッヒから困っている東側の国々へ向けて出発したのです。そしてスイスの入口は、難民たちのために解放されていました。

12月のその朝にそこに立っていて、私は一方の国では学生たちが撃たれる制圧的な権力を目にし、もう一方の国では、頭を下げ

て敬虔な祈りをし、援助と救いの手を差し伸べるべに向かうキリスト教徒たちの精神に触れ、その不思議なままでに対照的な姿に驚かされてしまったのです。ではキリストといわれるイエスについて私たちは何をしたらよいのでしょうか。「あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせ、かわいていたときに飲ませ、旅人であったときに宿を貸し、裸であったときに着せ、病気のときに見舞い、獄にいたときに尋ねてくれたからである。」(マタイ25：35-36)

イエス・キリストは単なる儀式の象徴ではありません。神の御子、地の創造主、旧約聖書のエホバ、モーセの律法を成就した方、人類の贖い主、王の王、平和の君なのです。私は、この末日の人々が祝福されて、さらに強い確信と確かな知識をもってキリストを知ることができることを永遠の御父に感謝したいと思います。私は、キリストがその比類ない福音の真理を完全な形で再び示してくださったことを感謝しています。さらに福千年の幕開けとして、大いなる栄光と力のうちに起こるご自身の再臨に人々を備えるため、神権と教会を回復してくださった主に心から感謝しています。ひとつの民として、私たち末日聖徒はキリストが確かに生きておられることを知っています。またキリストご自身から直接確かな指示を受けることができます。私はそのことを非常にうれしく思います。

「さて、この子羊に就きて為されたる様様の証の挙句、われらの為す最後の証はすなわち『主は実に生きたもう』こと是なり。われらは、彼がすなわち神の右に座したも

「それではキリストといわれる
イエスは、どうしたらよいか」



うを見たり。また、御父の生みたもう^{ひとりご}独子
なりと証したもう声を聞けり。すなわち
諸々の世界は彼の手により、彼の手を経て、
また彼に^{もろもろ}因りて先に作られ、また現に作ら
れ、これに住む者たちも皆神より生れたる
息子と娘なることを証したもう。」(教義と
聖約76：22-24)

これこそ、全人類に対する私たちの証で
あり、世の人々への私たちからの贈り物、
祝福です。キリストは私たちの喜びであり
救いです。これらの真理を人々と分かち合
うとき、私たちの生活はより大きな意義を
もったものとなるに違いありません。

ではキリストといわれるイエスについて、
私たちは何をしたらよいのでしょうか。キリ
ストご自身についてよく知り、キリストに
ついて証をしている聖典を学ぶことです。
またキリストの生涯と使命の奇跡に思いを
はせてみることです。そしてもう少し熱心
にキリストの模範に従い、み教えを守るこ
とです。

キリストに従うことによって、私たちは
御父のもとに帰ることができ、永遠の生命
を受けることができるのです。これらのこ
とをイエス・キリストのみ名により証いた
します。アーメン。

ホームティーチャーへの提言

強調点：ホームティーチングのとき、以下
の点を強調するとよい。

1. 私たちは絶えず「キリストといわれる
イエスについて自分は何をすることが
できるか」と自問すべきである。み教
えについてはどうだろうか。どのよう

にしたら主のみ教えを生活に定着した
ものとするができるだろうか。

2. キリストは与えることの模範である。
御父は御子を、御子のご自分の命を私
たちに与えてくださった。与えること
なくして真のクリスチャンとしての精
神はなく、犠牲なくして真の礼拝はな
い。
3. キリストは創造主である。善きもの美
しきもの「すべてはかれによってでき
た」のである。
4. キリストによって永遠の生命がもたら
される。キリストは復活の初穂となら
れた。キリストのおかげですべての人
が永遠に生きることができる。
5. キリストは慈悲と愛、そして特に^{いと}赦し
のすばらしい模範となられた。
6. ひとつの民として、私たち末日聖徒は
キリストが実在されるお方であること、
また私たちのためになる確かな指示を
キリストご自身から直接受けられるこ
とを知っている。

話し合いのための提案

1. 救い主に対するあなた個人の気持ちと
救い主の生涯の意義について意見を述
べる。
2. このメッセージの中に、家庭で読んだ
り話し合ったりするのによい聖句や言
葉はないだろうか。
3. 創造主、贖い主としてのキリストに関
して、定員会指導者や監督から家長に
あてられたメッセージはないだろうか。

それほど 神は世を愛して くださった

大管長

スペンサー・W・キンボール

教会の大管長に召される以前、私は十二使徒定員会の会員として、南アメリカ諸国をまわり、聖徒たちの集会に出席する責任を受けていました。私たちは行く先々で政府の方々や記者団から快く迎えられました。

そうした中で、ブラジル最大の新聞社のひとつの代表者から出された質問は、私の興味を引きました。彼女はその前日の日曜日に、福音の回復に関する少々力の入った私の説教を聞いていたのです。彼女は私に、なぜキリストは十字架にかけられたのかと尋ねました。「それはキリストご自身が『われは神の御子なり』と言われたからです。」私はそう答えました。そのあと、彼女の口から出た言葉に、私はショックを受けました。彼女はこう言ったのです。「キリストがそのようなことを言うはずはありません。キリストは神の御子などではなかったの

です。」

冗談かと思い、私は一瞬彼女の目をのぞきこみました。そして彼女が笑顔を見せるのを待ちました。しかし笑顔は見られませんでした。そこで私は彼女にはっきりとこう言ったのです。「キリストは確かに神の御子でした。ですからご自分は神の御子であると言われたのです。」

その後しばらくして、私は南アメリカ最大のある都市の復活祭版の新聞記事を読む機会がありました。その記事の作者は、名前のあとにいくつも学位を書き連ねた、祭司をしている人でした。私はその記事を全部読んでみました。記事の中で、彼は天地の主、贖い主、救い主という呼び方はいっさいせず、「イエス」という呼び名だけを使っていました。そしてナザレのイエスを、大工の息子以上の存在として述べている聖句を2、3引用しただけで、彼らのために



貴い血を流してくださったキリストに対して他のいかなる称号も用いていませんでした。

そこを訪問中、私は集会に出席していた400人の宣教師たちにこう尋ねてみました。「あなたたちはキリストをどう思い、どう言うことができますか。」これに対して、私は若い彼らから400の靈感あふれる確信に満ちた真実の証を聞くことができました。

私はパウロの言った言葉を思い出します。「兄弟たちよ。わたしもまた、あなたがたの所に行ったとき、神のあかしを宣べ伝えるのに、すぐれた言葉や知恵を用いなかった。なぜなら、わたしはイエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリスト以外のことは、あなたがたの間では何も知るまいと、決心したからである。」(Iコリント2：1-2)

主イエス・キリストに触れずに、どうしても本当の復活祭を祝うことができるでしょうか。そう、悪霊でさえイエスがキリストであることを知っているのです。あるとき、悪霊たちがやって来て次のように叫びました。「『あなたこそ神の子です』……しかし、イエスはかれらを戒めて、物を言うことをお許しにならなかった。彼らがイエスはキリストだと知っていたからである。」(ルカ4：41) また別のときには「悪霊がこれに対して言った、『イエスなら自分は知っている。パウロもわかっている。だが、おまえたちは、いったい何者だ。』」(使徒19：15) そしてまた別のときに、「彼らは叫んで言った、『神の子よ、あなたはわたしどもとなんの係わりがあるのです。まだその時ではな





J・J・テイソット画



いのに、ここにきて、わたしどもを苦しめるのですか。』(マタイ8:29)

救い主を釈放するよう良心の呵責^{かしかく}を受けていたポンテオ・ピラトは、内心、罪を自覚していたに違いありません。しかし、政治に対する野心やその他の理由から、妻の切なる願いも聞き入れず、彼は救い主を十字架にかけたのです。しかしそうしたあとでさえ、彼は十字架上にヘブル語、ギリシャ語、ラテン語であの有名な「ユダヤ人の王、ナザレのイエス」という言葉を書き記したのです。それを見て怒ったユダヤ人たちがピラトのところへやって来て言いました。「『ユダヤ人の王』と書かずに、『この人はユダヤ人の王と自称していた』と書いてほしい。』ピラトは答えた、『わたし^{わたし}が書いたことは、書いたままにしておけ。』

(ヨハネ19:19-22参照)

皆さんは、心に偽りのないナタナエルの話を read したことがあると思います。彼は、キリストを見てこのように言いました。「先生、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です。」(ヨハネ1:49)

非常にまれな経験をしてやっと視力を取り戻したパウロは、今までと何ら変わると



●「シメオンは幼な子を腕に抱き、神をほめたたえて言った、『主よ、今こそ、あなたはみ言葉のとおり^{とおり}にこの僕を安らかに去らせてくださいます、わたしの目が今あなたの救を見たのですから。』(ルカ2:28-30)





ころを見せず、すぐに諸会堂でキリストのことを語り、「イエスこそ神の子であると説きはじめ」ました。

聖職者たちは、なぜ聖なる御方をイエスとだけ呼び、他の神聖な呼び名で呼ぶことを故意に避けるのでしょうか。

世の中には、イエスという名前の人が大勢います。スペイン語を話す国々では、あちこちでその名前に出会います。彼らは「ハーサス」と呼んでいますが、それは「イエス」という意味なのです。しかし、光の君、私たちの救いの源となられたイエスはただおひとりです。

ジョセフ・スミスはこのように言っています。「私は実際に光を見た。その光の唯中に二人の御方を見た。そしてその方々は真実私にお言葉をかけたもうた。私が示現を受けたと言うために憎まれまた迫害せられても、なおそれは真実である。そして私がこのように言うために、人々が私を迫害し罵り偽ってあらゆる悪口をあびせている間に、私は自分の胸の中で語るようになった『何故真実のことを話すから私を迫害するのか。私は本当に示現を受けたのだ、私がどうして神に抗えようか。何故世の中の人々は、私が本当に見たものを見ないと言わせようと思うのか。私は示現を受けたのであるからそれが事実であるのを身を以て知っている。私は神がそれを知りたもうことを知っている。私はそれを打ち消すことはできなかつた。また敢て打ち消そうともしなかつた。私は少なくとも、本当にあったことを打ち消すならば神の怒りを受けて罪の宣告を受けることを知っている。』（ジョセ

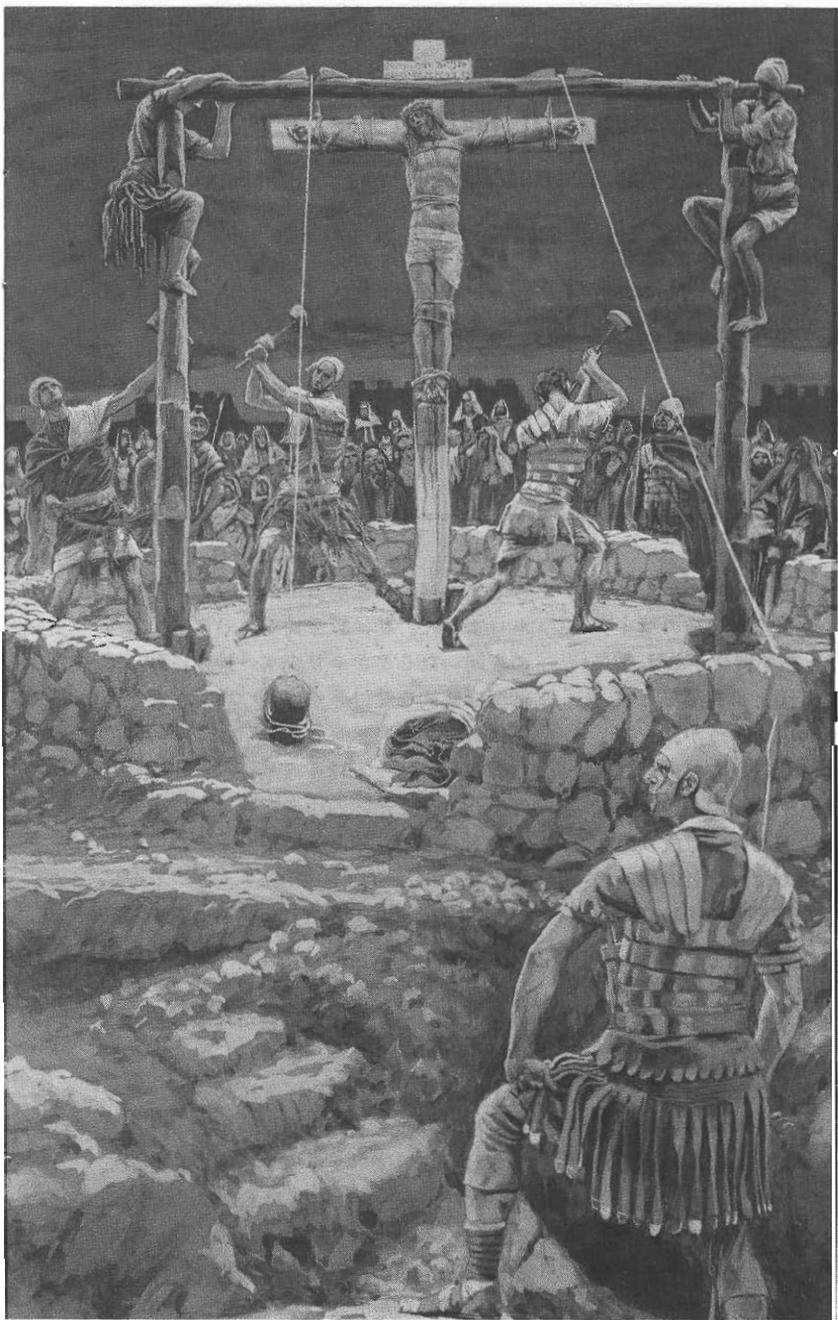
フ・スミス 2 : 25)

弟子たちが「人々は人の子をだれと言っているか」と尋ねられたとき、ペテロが何と答えたか覚えているでしょうか。彼らは声を上げて、人々は彼をエリヤまたは予言者のひとりであると言っていると答えました。それから主はもう一度お尋ねになりました。「それではあなたがたはわたしをだれと言うか。」私は、このときの主の人を見抜くようなまなざし、すばらしい期待に満ちたまなざしを思い浮かべることができます。そして、それに対する答えは、すべてのもので、最も心を打つ、厳かなものとなりました。「あなたこそ、生ける神の子キリストです。」そしてそれに続く次の言葉も決して見過ごされてはなりません。「あなたにこの事をあらわしたのは、血肉ではなく、天にいますわたしの父である。」(マタイ 16 : 13-17 参照)

言い換えれば、人がこのことをあなた方に語ったのではなく、御父が啓示としてお与えになったということ、すなわち偉大な啓示によってそのことを知ったということ

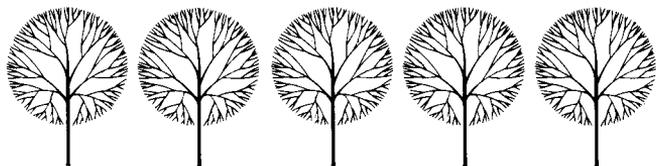
です。私は、この世のすべての男性、女性、子供たちに向けられている主のこの問いかけを、400人の宣教師たちに行してみました。「あなたがたはイエスをだれと言うか。」これに対して彼らはそろって「イエスこそ、生ける神の子キリストです」と答えてくれました。私は心からうれしく思います。

確かにイエスはキリストであり、生ける神の生ける御子です。私はこのことを皆さんに証いたします。



●「イエスを十字架につけたのは、朝の9時ごろであった。」
(マルコ15:25)

系図と神殿事業



ジョージ・D・ダラント

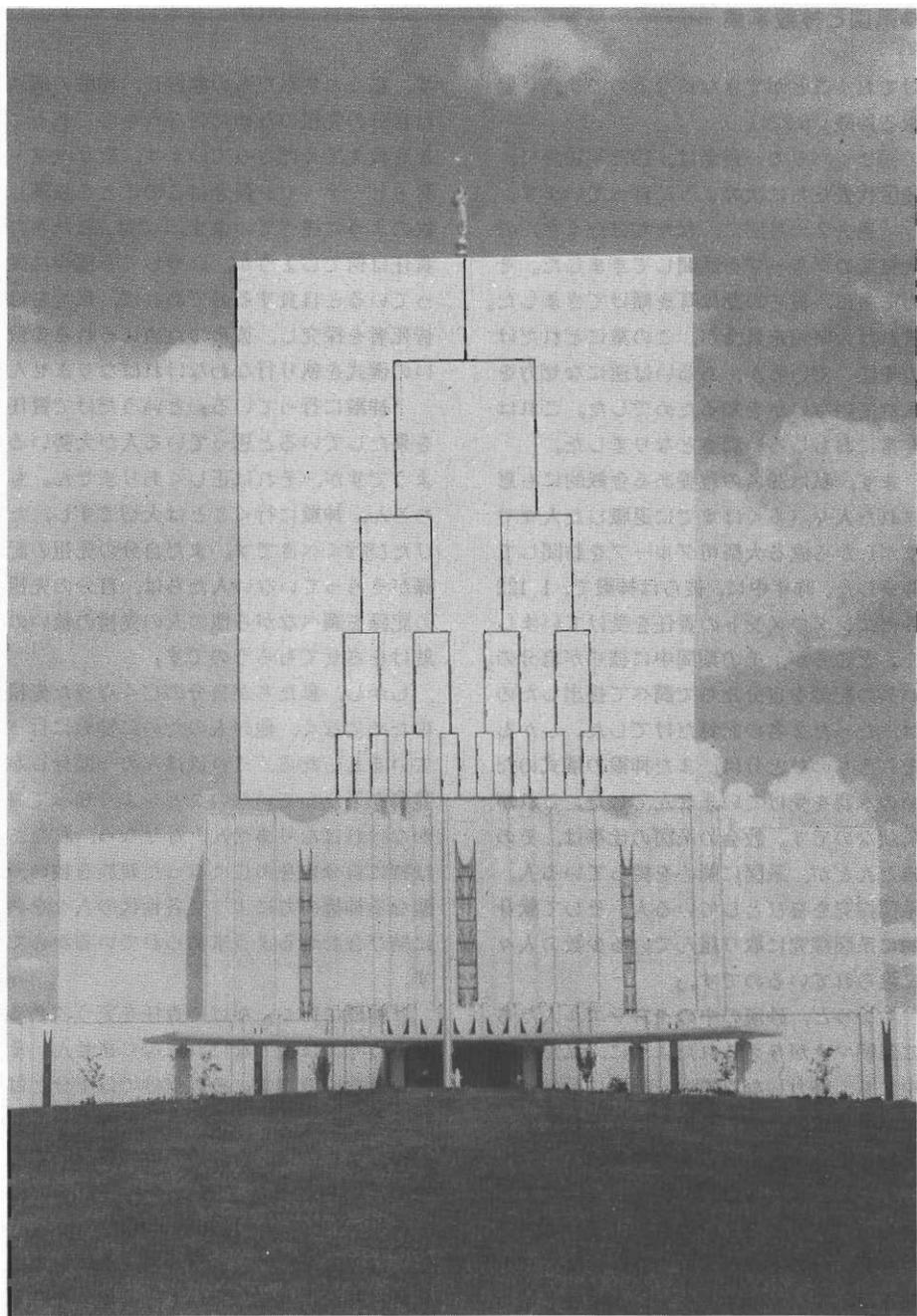
最 近私は、系図部の管理部長をしている七十人第一定員会会長会のロイデン・G・デリック長老と話す機会があり、彼にこう尋ねました。「系図と神殿事業とは、どういう関係にあるのでしょうか。」

彼の返事はこうでした。「片方だけでは成り立たないということですよ。」系図と神殿事業、確かにこれは片方だけでは成り立たないのです。このふたつは、死者の贖いのために主が定められたもので、決して分かつことのできないものです。末日聖徒にとって、家族の系図を調べることは趣味以上のものでなければなりません。永遠という観点に立ってみると、系図だけを考慮し、神殿事業を考慮に入れないのは（または神殿事業にだけ目を向け、もう一方の系図を無視することは）、ボール半分遊ぶようなまったく意味のないことなのです。

中には、そのボールの上半分でもいう神殿事業の方が、本質的により神聖で大切なものと思っている人が少なからずいるよ

うです。しかし転がるボールに上下の別はありません。私は教会員が次のように言うのを聞いたことがあります。「神殿に行って神聖な儀式を受けるのはいいんですが、系図にはどうも興味がわかないんです。」またこのように言っている人もいます。「できれば生涯ずっと系図の仕事が続けたいんです。とてもやりがいのある仕事ですから。系図図書館の開館時刻から閉館までずっと中にいたいくらいですよ。」もし私たちの意見がこのどちらかだとしたら、神殿に非常に多くの人々の名前が残されてしまうか、または名前を持つ人の長い行列が神殿にできてしまうでしょう。

十二使徒定員会のボイド・K・パッカー長老は、このふたつの関係を次のような言葉ではっきり述べています。「系図を心から大切に思う気持ちがなければ、神殿の儀式を尊ぶことはできません。系図は神殿にとって基本的な奉仕の業なのです。その系図プログラムが成功しなければ、神殿は開



●系図と神殿事業

けておくことができなくなるのです。」「(「聖なる神殿」 p.224)

同じくパッカー長老は、1975年10月に、地区代表たちに次のように言っています。

「過去2カ月間に、私たちはたくさんの大祭司のグループを訪問してきました。そして主に、彼らの話に耳を傾けてきました。それは大祭司定員会が、この業にどれだけ力を注いでいるか、あるいは逆になぜ力を入れていないかを知るためでした。これは非常におもしろい調査となりました。

まず、私は39名の教養ある金銭的にも恵まれた人々(多くはすでに退職した人々ですが)から成る大祭司グループを訪問してみました。昨年中に、彼らは神殿で、1,122件のエンダウメントの責任を受けていました。ところが、その期間中に彼らが自分の親族の記録を自分たちで調べて提出したのは、たった2名の記録だけでした。しかもそのうちのひとり、まだ神殿の儀式のための承認を受けていませんでした。これが実状なのです。教会の系図の仕事は、そのほとんどが、系図に関心を持っている人、系図探究を喜びとしている人、そして献身的に系図探究に取り組んでいる少数の人々に限られているのです。」

ちょうど、砂漠の中のイスラエル人たちに毎朝マナが与えられたように、私たちの中にも、努力しなくても、神殿に行けばいつでも儀式のための名前が用意されていると思っている人がいるようです。

しかし、私たちは自分の親族を探究し、自分の亡くなった先祖の儀式を受けるために神殿に行けるよう、自分自身の親族の名前を提出すべきです。主は、僕たちを通し

て、私たちや私たちの家族に、神殿の儀式は自分の先祖のために行なうものであることを教えてくださっています。故マーク・E・ピーターセン長老はこのことを強調し、次のように述べています。「では、私たちの責任は何でしょうか。いやしくも福音に従っていると自負するのであれば、私たちは皆死者を探究し、彼らのためにそれらの救いの儀式を執り行なわなければなりません。

『神殿に行っている』というだけで責任を果たしていると思っている人が大勢いるようですが、それは正しくありません。もちろん、神殿に行くことは大切ですし、たびたび行くべきです。まだ自分の先祖の記録がそろっていない人たちは、自分の先祖の記録を調べながら他の人の先祖の救いの助けをさせてもらうのです。

しかし、私たちが自分の亡くなった先祖のためでなく、他の人のために神殿に行っているとしたら、それはほんの一部分しか義務を果たしていないことをよく知っておかなければなりません。なぜなら、私たちは特に自分自身の亡くなった親族を救い、聖なる神権の力によって各世代の人々を共に結び合わせるよう求められているからです。

『神殿に行く』だけで責任を完うできるという考えは捨てなければなりません。そうではないのです。それだけでは十分とは言えないのです。

神は私たちに、自分の家族、自分の親族を救うという責任を課しておられるのです。」「(「大会報告」1976年4月)

あなたは今まで、自分の祖父や曾祖母のために神殿に入り、深い感動を覚えたこと

があるでしょうか。またそのときのことを想像することができるでしょうか。霊的経験と呼べるもので、このような経験ほど貴重なものはありません。私たちが亡くなった先祖の系図を探究し、彼らのために神殿に行くこと以上にそのような霊的な気持ちにさせてくれる教会活動は他にないのです。

これに関して、パッカー長老は次のように述べています。「この業に携わる教会員は、必ずや霊的に感化されます。そこにはエライジャの霊が満ちているからです。私たちは、各世代間の永遠のつながりに目を向けるとき、生活に押し入る細々としたことやささいな悩み、問題に対して正しい見方ができるようになります。そしてより忍耐強くなるのです。もし、威厳や知恵、靈感、霊性に包まれた生活を望むなら、みずから神殿と系図の業に打ち込むことです。」（「聖なる神殿」pp.224-25）

あなたや家族が探究し、作成した記録を神殿に送り、その人たちのために神殿に参入するとき、神殿での経験は特別なものとなります。

私は会員たちから「私の家族の方は、もう全員儀式が済んでいますから」という言葉や聞かせることがあります。冗談で言っているのならそれもいいでしょう。しかし、七十人第一定員会のW・グラント・バンガーター長老は次のように言っています。「皆さんの系図は、完全に終わったわけではありません。私の祖父母は今から55年前に、先祖のための神殿の儀式はすべて終わったと考えていました。ところが、その後私の家族は、さらに1万6千人の親族の名前を探

しあてました。」（「聖徒の道」1982年7月号, p.125）

改宗したばかりの人や今まで系図をおろそかにしていた会員たちにとっては、すばらしい機会が待ち受けているわけです。畑は早白くして刈り入れを待っています。もし毎年バプテスマを受ける約5万件の家族が、それぞれ亡くなった4代までの先祖とその先祖の亡くなった子供たちの名前を神殿に送れば、少なくとも350万人が毎年これらの神聖な儀式にあずかれるのです。

自分の先祖の記録を提出しようという気持ちを持ち続けてください。教会にはやるべきことがたくさんあります。だからといって系図が他のことを押しのけて良いというわけではありませんし、系図が他に押しやられて良いというわけでもありません。一人一人が、また家族が努力してよく整ったプログラムを持っていれば、自分たちの日頃の努力だけで十分に名前を確保し、亡くなった先祖たちのために儀式を行なうことができるのです。もちろん、私たちは2マイル行く精神で他の人々のためにも神殿に入らなければなりません。

デリック長老の言うように、系図と神殿事業は確かに相並ぶものなのです。片方だけでは成り立たないことを知るとき、大きな祝福がおとずれます。この両方に携わって初めて、私たちは死者の贖いという栄光ある業についている喜びを胸に満たすことができるのです。（ジョージ・D・グラント：8児の父親、教会神権系図部部长、ソルトレーク・シティー・オリンピスマウンテン第3ワード部監督）

「お願いだ、神殿の儀式をしておくれ」

テリー・リン・フィッツシャー

私 たち夫婦が結婚して1カ月もたたないうちに、夫に軍事教練の通知が来ました。単身赴任のため、夫が留守の6カ月間、私はユタ州プロボに残って働きました。それは私が思い描いた結婚生活と違い、夫は2千キロも離れた所で、顔を見に帰ることさえできないのです。私はみじめな新妻でした。

そうしたある晩、私は心に語りかけてくる声を聞いて、深い眠りから目を覚ましました。声に耳を傾けると、それは高祖父が話しているのだとわかりました。少しの間そのまま横になって耳を澄まし、考えました。高祖父は自分の家族を自分と結び固めてくれるように言っているのです。高祖父は1800年代の中頃に合衆国に住んでいた人です。ジョージ・ウィルキーという名で、南北戦争そのものと戦争前の経済状態のせいで、愛する妻や4人の息子と遠く離れて生活しました。そして南北戦争に従軍して

いる最中に死んでいます。

私はジョージ・ウィルキーが家の妻子にあてて書いた手紙や、父親の不在のときに家族が送った手紙を以前に読んでいました。ジョージ・ウィルキーの日記も読んだことがありました。その手紙や日記には家族同士の愛や会いたい気持ちがよく表わされていました。私の先祖は末日聖徒ではなく、福音の祝福を受けていません。今、この真夜中に、ウィルキーおじいさんが来て私に言うのでした。「テリー・リン、どうか家族を私に結び固めておくれ。永遠に一緒にいたいのだよ。どうか、お願いだ、神殿の儀式をしておくれ。おまえは今夫と離れているが、そのまま永遠に離れてしまうのを考えてもみておくれ。恐ろしいことだ。私は妻と結び固められたい。」そしてその声はふっつりと消えてしまいました。私はまずよく考えることだと思い、寝たまま高祖父のことを考えました。系図を調べなければい

けないので、時間のあるときに始めることに決めました。そしてまた眠り始めました。すると声がかたして、まったく同じことを言うので驚いてしまいました。このときは系図の仕事をするように私をせかすのです。私は系図についてとにかく何かを翌日からしようと決心しました。ところが、おじいさんは翌日ではあてにならないことがわかっていたのでしょうか。3回目も私に同じことを言い、とにかく今何かをするように言うのです。

私はどうなっているのかまったく信じられませんでした。夜の夜中に起き出して系図の仕事を始めました。雑多な書類や記録をより分けて、最初に必要な資料を見つけ出し、それから出生や結婚や死亡の証明書を請求する手紙を書きました。そのときにできることを全部済ませてから、ようやくベッドにもぐり込みました。

こうして、私は夫が留守の6カ月の間に系図の仕事に熱心に取り組みました。そしてついにいとこと一緒に神殿に行って、高祖父母の結び固めを行なうことができました。神殿の中に高祖父母の家族の存在を感じ、また、やっと彼らが永遠に結ばれて本当に幸せになったことが胸にひしひしと伝わってきました。

その後4年間、夫はよく用事で家を留守にしました。私は高祖父母たちの日記を読んでは慰められ、励まされたものです。高祖父母たちが似たような状態を経験したと知って、自分の生活を正しい見方で見ることができたと思います。彼らがとても身近に感じられて、会ったことはないのによく知っているような気がしました。高祖父が

知らずに示してくれた模範は、今でもそしてこれからも、私にとって靈感の源となると思います。(テリー・リン・フィッシャー：3児の母、ブリガム・ヤング大学学生、BYU第102ワード部初等協会副会長)



第 2次世界大戦が終わって数年後、私の家族(夫、4歳と2歳の男児、私)はユタ州のスパニッシュフォークに引っ越しました。その家に移って半年ほどしてから、私は初等協会の託児のクラスの教師の責任を頼まれました。

私はとても恥ずかしがり屋でした。

教会員の家庭に生まれたのですが、教会

で役職を受けたことはありませんでした。それで、知り合いだった初等協会の会長(レベッカ・クリステンセン姉妹)に言いました。「とても教えられません。これまで教えたことなどないんです。」会長は私が恥ずかしがり屋だということだけでなく、子供好きであることもご存じでした。彼女は私に愛を示して、やってみさえすればこの仕事が好きになるとおっしゃいました。私は辞退しました。ところが彼女は椅子を立てて出て行くときに、次の初等協会のと

できますとも

イレイン・ティーズデール



きに一度だけ教えてくださいと言われたのです。

彼女がいなくなってから、椅子の上に彼女が置いていったテキストがあるのに気づきました。返さなければと思いましたが、手はそれとは裏腹にテキストを開き、私はテキストの中のすばらしいレッスンを読んでいました。それからは毎日テキストを返そうとは思いますが、会長に何と云えばよいか考えるのが日に日におっくうになっていきました。初等協会の日はすぐにやって来ました。自分でレッスンをするか、さもなければレッスンをしてくれる人を捜さなければならぬので、私は自分でテキストを勉強し、準備しました。「1回だけ教えて、あとはテキストを返そう」と考えたのです。

結局、私はそのクラスを3年間教えました。それから別のクラスを5年教えました。ワード部がふたつに分かれると、初等協会の会長会に召されました。

以来これまでに、私は指導者としての役職をたくさん受けてきました。ピーハイブのクラス指導者、若い女性の会長、ワード部扶助協会の副会長、そして会長、ステーク部扶助協会書記。このような召しのおかげで、私は以前よりはつつつとして明るくなりました。召しを受けたために恥づかしさを克服し、隣人を愛することができるようになったからです。それもみな、信頼し、愛する指導者が本当に私のことを思い、最初の召しに対して「いいえ」と言わないようにしてくださったおかげだと思います。

(イレイン・ティーズデール：ユタ州スバニッシュフォーク在住)

「それが私が いただくもの ですか」

チェリー・G・ウルフ

あるとき母のリニー・P・ゴールドが私に話してくれた経験は、それからの私の人生に大きな影響を及ぼしました。

第2次世界大戦のあと、ドイツの貧しい人々のために衣類を寄付するように教会員に呼びかけがあったそうです。そこで母は引き出しや押し入れから、捨てるには惜しくて取ってある古着を集めていました。そのとき突然、「それが私がいただくものですか」という声を聞いたそうです。

「あっ、いいえ」と母はすぐに大きな声で答えました。そしてすぐさま家中で一番上等な衣類を出してきました。母は翌日印刷されることになっていたワード部新聞の編集者だったので、さっそく衣類をつるの詩を書きました。新聞を読んだ人たちはその呼びかけに強く感動して、たくさんの寄付が集まりました。

母がどうしてもあのように気前よく人に物をあげるのか、どうしていつも人のために尽くしているのか、今私にはそのわけがわかりません。母は主にそれを差し上げているのです。(チェリー・G・ウルフ：オレゴン州ヒルズボロ在住)

新会員の 皆さんへ

七十人第一委員会
ローレン・C・ダン

教 会員になったばかりの方、あるいはもうすぐ教会に入ろうという皆さんにお話したいと思います。

新会員の皆さん、末日聖徒イエス・キリスト教会によろこおいでくださいました。パウロの言葉を借りてこう申し上げたいと思います。「あなたがたは、もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族なのである。……キリスト・イエスご自身が隅のかしら石である。」(エペソ2：19-20)

みたまを感じてキリストの教えを受け入れた皆さんは特別な方々です。主ご自身が皆さんについて、「わが選民はわが声を聞き、その心を頑固かたくにせざればなり」(教義と聖約29：7)と言っておられるからです。

旧約聖書の時代に、神の選民はひとつの国にまとまって生活していました。予言者がいて、主が彼らに語り、導いておられました。やがて彼らはイスラエルの家と呼ばれるようになりました。ところが時代を経るにつれて神を忘れる人が多くなり、蔓延

した悪のせいで折々に民が世界中に散らされてしまったのです。

しかし主は、末の時代に「散らされたイスラエル」をかえりみて、故国に集めるとも言われました。

「わたしの群れの残った者を、追いやったすべての地から集め、再びこれをそのおりに帰らせよう。彼らは子を産んでその数が多くなる。わたしはこれを養う牧者をその上に立てる、彼らは再び恐れることなく、またおののくことなく、いなくなることもないと、主は言われる。」(エレミヤ23：3-4)

この予言は皆さんについて、また皆さんがイエス・キリストの教会に入れられたことについて述べているのです。皆さんは「よい羊飼いの」声に聞き従った選ばれた民です。

では、今皆さんの身の上を起こっていることと、これから起こることについて、ここでもう一度見てみましょう。

まず第一に、教会に導かれるにあたって

皆さんに起こったことは、どれもキリストが中心になっていました。次のように言った初期のニーファイ人に共鳴されることとします。「私たちはキリストのことを話し、キリストのことを喜び、キリストのことを説教し、キリストのことを予言し、また私たちの子孫にどこに罪の赦しを求めるかを知らせるために……」(II ニーファイ 25:26)

皆さんはごく初めの頃から、罪の赦しを得るために水に沈められるバプテスマの準備をしてくださいと言われたことでしょう。それはイエス・キリストの福音を、誓約や戒めとともに正式に受け入れることを意味しました。

今、そのバプテスマが確かなものであることを知っておられると思います。バプテスマの執行者が「権威ある者の按手により」(信仰簡条第5条)神から召された人であったからです。彼は自分から立ったのではなく、神から召されていました。

皆さんは、教会に入るに際して大管長会から示された条件を満たしておられました。

バプテスマのあとは天父からの最上の賜を受け、それを正しい方法で資格ある人から授けられたのです。慰め主、真理のみたまとも呼ばれる聖霊の賜です。宣教師が主の教会の教えを皆さんに教えたとき、その神聖な清めの力に気づかれたこととします。

宣教師が教えと戒めを伝えたときに、それが真実であると自分でわかるように、主に祈ってくださいと勧めたことを忘れないでください。彼らは近代の啓示を引いて、主がどのようにして答えられるかも告げま

した。

「汝心の中によく思い計り、その後願うこともし正しからば汝願わざるべからず。」(教義と聖約9:8)

「然り、見よ、われ今汝に來りて汝の心の中に留るべき聖霊によりて汝の智と情に告げんとす。」(教義と聖約8:2)

「これによりて汝にその正しきを感じしむ。」(教義と聖約9:8)

当時は十二使徒定員会会員であったマリオン・G・ロムニー長老が、自分が改宗しているかどうかはどうすればわかりますかと問われたときに、こう語っています。

「聖きみたまの力で癒されたときに、人は改宗を確信します。そしてそれは、自分の心にわき上がる思いによってわかります。なぜなら、ベンジャミン王の民が罪の赦しを得たときと同じ思いが、改宗した人の胸を満たすからです。こうあります。『もはやその罪の赦しを受けて良心が安らかになったから、主の「みたま」がかれらに下ってその心が喜びに満された。』(モーサヤ4:3)」「(大会報告)1963年10月、p.25)

バプテスマのあと、聖霊を受けて、皆さんの生活に新しい何かが加わったはずです。みたまの温かさや平安とともに、一層の忍耐とさらに深い理解、大きな確信、以前であれば不可能と思われることを成し遂げる力や自分の価値に対する認識、周りの人々に対する一層の理解、福音の原則により深く感じる心や聖典についての知識がもたらされたことでしょう。

では、皆さんはこの先に何を望むべきでしょうか。ある期間を置いたのちに、神殿に行きたいと思われるでしょう。神殿の目

●新会員の皆さんへ

的のひとつは夫婦を永遠に結び固めることです。つまり、「死がふたりを分かたずまで」普通に結婚した夫婦は、この教会の神殿の中でこの世から永遠にわたって結び固められるのです。

人間に対する神の計画の大目的は、神のすべての子供たちのためにみもとに帰る道を備えることです。みもとに帰ることが永遠の生命なのです。イエスをキリストとして受け入れ、その福音の戒めに喜んで従う人は、永遠の生命への道を歩んでいます。その永遠の生命を受けるために必要なもうひとつのことは、永遠の結婚です。神殿での結び固め、つまり神殿結婚が行なわれるとき、その家族も永遠になります。言葉を換えれば、家族がひとつの単位となって神とともに生活するのです。また、福音に従いながら結婚の機会がなかった人々も何ひとつ失うものはないと、救い主が約束しておられます。神の計画は完全だからです。神殿結婚の実際的な祝福として、皆さんは現代社会の希少グループに加わることになります。社会学者は米国内で3組に1組の割合で結婚が破綻はたんしていると言っていますが、神殿で結婚する夫婦の離婚率は100組のうち10組にも満たないほど低いのです。イエス・キリストの福音がもたらす祝福には家族が永遠に結ばれることとともに、教会でしっかり基盤を据えた人々はこの世においても良い家族でいられるということが含まれています。

皆さんは今、新会員としてワード部や支部の一員となりました。皆さんと同じように福音の中で成長しつつある人たち、キリストのように生活しようと努力している人

たちの仲間に加わりました。ずっと以前から教会員である人たちもいます。ほとんどの人が最善を尽くして日々進歩しようと頑張っています。しかしそれでも良くない日々はあります。時には、大抵は故意にはないのですが、皆さんの気分を害する人もいるでしょう。そのようなときは、その人を助けるつもりで忍耐して、腹を立てないでください。そして、問題を克服するための時間を与えてあげてください。こうした経験はめつたにないと思いますが、まったくないとは言いきれません。

教会員とよく知り合うようになると、だれとも仲は良いでしょうが、背景や趣味が似ていて特に気の合う人が何人かできることと思います。監督または支部長、それにホームティーチャーは、あなたが信頼を寄せる人となることでしょう。姉妹であれば、扶助協会会長や訪問教師も力になってくれる人たちです。若人には若人の指導者がいます。教会員の互いに持つ愛と理解が一番発揮される場合は、ホームティーチャーや訪問教師による家庭訪問です。まだその訪問を受けていない人は、間もなく話があると思います。

新しくてまだ教会に慣れなくても、自分がすでに最も素晴らしい貢献をしていることを忘れないでください。皆さんの活気と新鮮さが、ワード部に新たな息吹を吹き込んでいるのです。古い教会員は言わないかもしれませんが、皆さんの周りになると楽しいのです。皆さんが心をなごませる雰囲気を持っているからです。古い教会員に証がないというのではなく、皆さんの新鮮な心が、自分が改宗したときの感動を

思い出させてくれるのです。予言者である
スペンサー・W・キンボール大管長も、皆
さんが教会を活気づける大きな働きをして
いると語っています。

新会員の皆さんは、それぞれの成長に役
立つ課題をこれから与えられるでしょう。
証は強いと同時に壊れやすいものです。か
げりのない明るさで燃えることができるよ
うに、証を養い育てなければなりません。
心から祈り、教会の集会に出席し、什分の
一を納め、安息日を聖くし、聖典を読むな
ど、すべての戒めに注意を払うことで、証
は養われます。そうすれば、聖霊の清め
の力が常に皆さんとともにあるでしょう。

最後に、皆さんは新しいということで、
教会員生活の長い人よりも遅れていると感
じるかもしれませんが。確かに学ぶべきこ
とはたくさんありますが、しかし別の面で、
主は生まれたときから教会で育った人と同
じ祝福をあなたに恵まれます。

主はその教えを、ぶどう園の労働者を雇
った主人のたとえ話で語っておられます。
ある家の主人が夜明けとともに最初の労働
者たちを雇ったとき、主人は何もしないで
立っている人たちを見つけ、その人たちも
雇いました。12時頃と3時頃と5時頃にも
また雇いました。その日の終わりに、労働
時間が人によってまちまちなのに、主人は
同額の賃金を皆に支払ったのです。

労働者たちが不平を言うと、主人はこ
う言いました。

「友よ、わたしはあなたに対して不正を
してはいない。あなたはわたしと1デナリ
の約束をしたではないか。自分の賃銀をも
らって行きなさい。わたしは、この最後の

みたまの温かさや平安とともに、
一層の忍耐とさらに深い理解と
大きな確信がおとずれるのです。



者にもあなたと同様に払ってやりたいのだ。
自分の物を自分がしたいようにするのは、
当りまえではないか。」(マタイ20：13-15)

この印象的なたとえ話の教えるところは
いろいろありますが、ひとつは、忠実であ
りさえすれば、真理を知るようになったす
べての人に主が救いと昇栄を同じように約
束しておられるということです。これは臨
終の懺悔^{ざんげ}ではないことに注意してください。
たとえては、主人の呼びかけに応えてすぐ
さまぶどう園へ行った全員に、いつ主人の
声を聞いたかということには関係なく、同
じ賃金が払われたことが教えられています。
早くとも遅くとも、呼びかけを聞いたのに
ぶどう園へ行かなかった人には、何も約束
はないのです。

このたとえ話は、主が新教会員も古い教
会員も王国の責任に召されることを示して
います。どの人にもそれぞれ能力や可能性
があり、啓示によって最適の役職に神から
召されます。それが、教会員生活の長い短
いをまったく考慮せずに行なわれることも
時にはあるのです。

教会員としての知識や進歩にも同じこと
が起こります。以前には不可能と置いてい
たことが、みたまの賜のおかげでできるよ
うになったということ、皆さんも経験す
るでしょう。神権指導者の導きや聖典の教
えともあいまって、それは皆さんにとって

大きな祝福となります。

力のよりどころのひとつは、古い教会員です。主はすべての教会員に、新しい兄弟姉妹をキリストの福音の中で養い、力づけるように勧告しておられます。神によって結ばれた兄弟姉妹は、主が、「人をかたよりみ」(使徒10:34)ず、全員にその模範に従うことを期待しておられるのです。

使徒行伝の10章には、律法に従う人はだれでも主に受け入れられるということ、ペテロが悟るに至ったいきさつが書かれています。ご存じのように、ペテロはそのことについて、地上の四つ足やほうもの、また空の鳥など各種の生き物が出てくる示現を見ました。

「そして声が彼に聞こえてきた、『ペテロよ。立って、それらをほふって食べなさい。』」(13節)

当時、それらの生き物はユダヤの律法によって食べるのを禁じられていたため、ペテロはこう答えました。「主よ、それはできません。わたしは今までに、清くないもの、汚れたものは、何一つ食べたことはありません。」(14節)

するとそれに対して、主から次のような大切な言葉が返ってきました。

「神がきよめたものを、清くないなどと言ってはならない。」(15節)

ペテロはそのことを少し不思議に思いましたが、あとでこう述べています。「ところが、神は、どんな人間をも清くないとか、汚れているとか言ってはならないと、わたしにお示しになりました。」(28節)

このとき以降古代の教会では、福音がユダヤ人のみならず、救い主を受け入れてイ

エス・キリストの福音の戒めを守るすべての人に伝えられることになったのでした。同じことが今、主の回復された教会にも言われます。信仰、悔い改め、バプテスマ、そしてそれに続く聖霊の賜を通じて神が清めた人は、教会に受け入れられるのです。主に清いと宣言された人は、同じようにして教会に入り、教会員に受け入れられます。主も主の教会の会員も、門をくぐった兄弟姉妹に対して「人をかたよりみる」ことはありません。

お互いに受け入れ合うこの一致については、アルマが、バプテスマを受けて神の王国に入る人の状態はそのようであると指摘しています。

「あなたたちは神の羊の群に入って神の民と言われること、互いに苦難を軽くするために喜んで助け合うこと、悲しむ者を思いやって共に悲しむこと、慰めが要る者を慰めること、……いついかなる時でも、どのような所に居ても、どんなことについても、死に至るまでも神の証し人になりたいと心から思っている。従って……主の御名によってバプテスマを受けるのに何のさしつかえがあろうか。」(モーサヤ18:8-10)

新会員が受け入れられていることは、該当する年齢に達した男性の改宗者がバプテスマのあとすぐにアロン神権を受けるとか、新しい兄弟姉妹が無理のない程度に教会の責任に召されるといった教会の基準にも示されています。

しかしまた、教会歴の長い安定した人たちが、神の王国に入って自分の道を歩もうという新会員にとって重要な助け手の役目を果たしています。最近改宗したアラン・

ジョン・ヌベック兄弟は、家族の改宗と古い教会員たちの役割についてこう述懐しています。

「私たちが末日聖徒イエス・キリスト教会に入ったひとつの大きなきっかけは、バプテスマを受ける前の木曜日の集会でした。私たちといろいろな点で似ている家族に会ったのです。彼らは間近になったバプテスマについて話をし、説明してくれました。バプテスマ会に行くと、ドアの所で私たちを出迎えて、バプテスマ会に出席して下さるといふんです。バプテスマの水に入っ
て見上げたときにその友人たちの顔が見えて、ずいぶん落ち着けました。

教会に入ってから、集会のときにほかの家族と一緒に私たちの隣に座って下さり、彼らからの感化は非常に大きなものがありました。教会のいろいろな教義を説明してくれましたし、聖典の勉強も手伝ってくれました。普通の日や週末や、特に家庭の夕べの夜などはいろいろとお世話になり、特別活動の計画の仕方なども教わりました。断食証会のあとで、ほかの教会員と一緒に家庭に招かれたことが何回もあります。今でも親交が続いていて、わからないことは教えてもらっています。」

私はこの友情から、末日聖徒イエス・キリスト教会が真実だとわかります。

皆さんは今、末日聖徒イエス・キリスト教会の信頼する大切な会員として、新しい門出をしました。主は、「命にいたる門は狭く、その道は細い」(マタイ7:14)と言っておられます。皆さんはこの門をくぐり、神のみ前に帰る道に立っているのです。

主は皆さんに聖霊という貴重な賜をくだ

神殿結婚の実際的な祝福として、
皆さんは現代社会の希少グループに
加わることとなります。



さいました。聖霊は皆さんがそのささやきに従うとき、皆さんの証を強く守り、皆さんをあらゆる真理に導きます。主は、皆さんが主の道を正しく教えられるように、地上に神の王国である教会を建てて下さいました。また、共に学び、成長し、永遠の生命に導く「鉄の棒にすがりながら」互いに助け合うように、神権指導者や友である聖徒たちの助けと友情を備えて下さいました。

最後に、主は皆さんをあまたの神の子供たちで満ちた世界に送っておられます。「真理のある所を知らざるが故にただ真理に遠ざかる」(教義と聖約123:12)子供たちです。

彼らに道を示すのは、皆さんの模範です。彼らを動かし、善と真理を知らせるのは、外に輝き出る皆さんの心です。すばらしい人々がイエス・キリストの福音を味わうのは、皆さんの努力によってなのです。山の上にある町のように、あなたの光は明るく燃えています。

そうです、兄弟姉妹である新会員の皆さん、環境を異にし、背景を異にする一人一人の兄弟、姉妹、皆さんの船は平和で安全な港に着きました。大空の最も新しい星である皆さんに申し上げます。「ようこそいらっしゃいました。ようこそ我が家に、お帰りなさい。」



れています。天使はヨセフにエジプトに逃げるように警告しましたし（マタイ2：13参照）、エリヤ（エライジャ）に食べ物を与えたり（列王上19：5—8参照）、ペテロを牢から逃れさせたり（使徒12：17参照）、ニーファイを兄たちから守ったり（I ニーフアイ3：29—31参照）、アブラハムがいけにえにされようとしたときに縄をほどいたり（アブラハム1：15参照）しました。

ジョン・A・ウィットソー長老は、この神権時代に天使の導きと恵みを通じて祝福された人は大勢いると述べました。彼はこう言っています。「たしかに天使はしばしば事故や危害から、あるいは誘惑や罪から私たちを守ってくれる。こうした天使は守護天使と呼んでも差し支えない。通常理解を越えたところから導きや守りを受けたことを証した人、証できる人は多いのである。」（G・ホーマー・ダラム編「証左と和解」第3巻、pp.402—403）

ある人たちは、義しい人たちが亡くなったからも愛する人々の生活に影響を及ぼし続けることがあると教えています。ジョセフ・F・スミス大管長はこのように言いました。「この地上を去り、忠実であってこの権利と特権を享受するにふさわしい私たちの父親、母親、兄弟姉妹、友人は、肉体において愛を培った人々に対し、神のみ前より、愛、警告または叱責、教えの言葉をもたらすために、再び地上に来てその親戚や友人を訪れる使命を受ける可能性がある。」（「福音の教義」p.418）

ひとりであるか複数かを問わず、気づかないうちに天使の導きと恵みがあるのは明らかかなようです。ブリガム・ヤングはある

ときこのように教えました。もし眼前にいる天の住人を見る目が私たちにあったなら、私の目の前のここに座っている人々に加えて大勢の天使たちが見えることであろう。」

（ジョン・A・ウィットソー編「ブリガム・ヤング説教集」p.42）

天使は守護の役目を果たします。彼らの存在は見えたり見えなかったり、わかったりわからなかったりします。世を去った愛する人たちが天使の資格で人々を慰めたり警告をしたりもします。

では、個人に特別な守護天使がついているのかどうかという質問に入ります。聖典には、守護天使がいることを示唆するものは何もありません。教会幹部が書いた本にも、否定的な見解が述べられています。ジョン・A・ウィットソー長老はこう言いました。「世に生まれ出る一人一人に、常時一緒にいる守護天使があてがわれるという一般の信仰は、しかるべき根拠があるものではない。事実、聖霊が共にあれば、そのような天使の付き添いは不要と思われる。」

（G・ホーマー・ダラム編、p.403）

ブルース・R・マッコンキー長老は、「人間すべて、あるいは義人のすべてに守護者として働く天使がいると考えることは、主が死すべき人間を慈悲深く見守ってくださる方法に関して啓示された、基本的な事実と反するものである」（「モルモンの教義」p.341）と書いています。

このように、各自に守護天使が割り当てられていると考える根拠はありません。しかし天使たちが、この地上の人間を戒め、守り、強くしてきたことは確かです。

モルモン経の各ページに年代が書かれています。それはどれほど信頼できるものでしょうか。訂正が必要な箇所はありますか。

本 当の意味では、モルモン経自体が年代記です。この本には年代の数え方が3通りあって、リーハイがエルサレムを去ったときからの年数と、判事治世の年数と、キリスト誕生からの年数が使用されています。しかし今の私たちから見れば、紀元前あるいは紀元後の何年というふうに統一した方が便利です。1888年に出版された大判サイズのモルモン経はそのようになっています。大判サイズは1906年に年代を一部修正して再版され、1920年の発行分からは、改訂された年代が英文ではページの下に加えられて、イテル書以外は各ページに年代が記されました。この方法の明らかな利点は、本文中に所々に年代が書いてあるものと比較して、その出来事のあった時代が見てすぐにわかるということです。

ニーファイ人の1年は、今の4月から始まったようです。(IIIニーファイ8:5)ですから「十四年目が始まって」(IIIニーファイ2:17)とあれば、紀元14年の4月から14年目が始まり、紀元15年の3月まで続いたわけです。同じことが紀元前の場合にも言われます。判事治世の10年目は紀元前82年に始まりますが(アルマ8:3)、ニーファイ人の暦で同じ年の10月と言えば紀元前81年になります。(アルマ14:23)

年代を理解する上で、もうひとつ役立つのは、「約」という語の表わす意味です。「約」というと、一般的にモルモン経では、さかのぼって9カ月から翌年の3カ月の間を指します。そのため、「紀元前約83年」とあれば、それは前後数年を意味するのではなく、その出来事が紀元前83年4月から紀元前82年3月までの間に起きたことを示しているわけです。

年代は、述べられている出来事のあった時代を示すというのが原則ですが、そうではない場合が多少あって、これには少し説明が必要です。Iニーファイ9:2-5には、紀元前570年頃まで(IIニーファイ5:28-30)情報は得られないことがはっきり書かれています。ところがそのページには「紀元前600-592年」と欄外に印刷されています。また、IIニーファイ12章から24章のイザヤの言葉には「紀元前559-545年」と年代が記されていますが、それはイザヤがこの記録を書いた時代やその出来事があった時代ではなく、ニーファイが記事を小版に写したおおよその年代を表わすものです。モルモン言は「紀元約385年」とありますが、12-18節はそれより前の紀元前124年に終わったベンジャミン王の統治時代の記事です。モロナイ書の8、9章は息子にあってたモルモンの2通の手紙ですが、もともとの手紙は、紀元385年のクモラの丘の戦いのしばらく前に書かれたものと考えられますから、「紀元400-421年」とある年代は、モロナイが手紙を版に書き写した頃を指しています。

厳密に言って聖典とは、靈感によって翻訳されたモルモン経の本文であって、その

ヘブライの節分けや章の要約やほかの箇所との参照や年代は、現代の読者の便宜を図って追加されたものにすぎません。各ページごとにある年代は便利と思いますが、本文に載っている情報を正しく反映してこそ正確なはずで

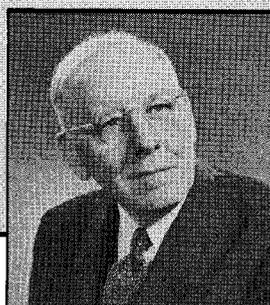
す。現在の年代には、その意味で多少の問題があります。それが計算の間違いによることもあります。たとえばII ニーファイ5：28では、ニーファイが「エルサレムを出てからはや三十年過ぎ去った」と書いています。リーハイの一行がエルサレムを出たのは紀元前600年ですから30年後といえは紀元前570年のはずですが、II ニーファイ5：28に付記された年代は「紀元前569年」で、1年の計算違いです。もうひとつは、紀元前121年（モーサヤ7：2-3）に一行と共にリーハイ・ニーファイの地へ向かったアンモンの例です。現在の年代では、ア

ンモンがリムハイ王とその民を救い出して帰ったのが出発の1年前になっているのです。（モーサヤ21：22）帰宅が少なくとも1年は後にならなければおかしいわけです。モーサヤ23：25から24：25の出来事は、アルマを見つけた軍隊がアンモンとリムハイを追いかけていた軍隊と同じ軍隊ですから、紀元前121年にはなっているはずですし、アルマ17：6の記事に基づけば、モーサヤの息子たちの出発は紀元前91年と変更しなければなりません。（モーサヤ28：9）また、アルマ36：1からアルマ43：2の出来事は判事治世の17年目に起きているので、年代は「紀元前約74年」となるはずで

す。現在のモルモン経に載っている年代は、1920年版を発行したモルモン経委員会が認定したものです。



ホテルの入口で 見た謙遜さ



フランク・L・クレイブン

謙遜はよく耳にする言葉である。しかしその意味を本当に理解しているだろうか。私自身、数年前のある朝、ホテルの入口で出会った光景を目にするまで、謙遜の意味を理解していたとは思えない。ソルトレーク・シティにあるホテル・ユタのロビーの入口近くに腰をかけていた私は、柔らかい椅子に身を置いて、ホテルの正面玄関を通る人の往来を興味深く見つめていた。時がたつにつれて、入口は混雑し

てきた。人々はせわしなく行き交い、ぶつかり合い、互いにイライラした表情を交わしながら出入りしている。自分の目標を追っているとき、人はどうしてこんなにも他人に無関心でいられるのだろうか。

ちょうどそのとき、ホテルの玄関に立ったその人は、まったく違っていた。すでに80歳を越えていた十二使徒定員会会員のジョージ・Q・モリス長老は、お礼の会釈もせずに通っていく人々のため、しばらくの



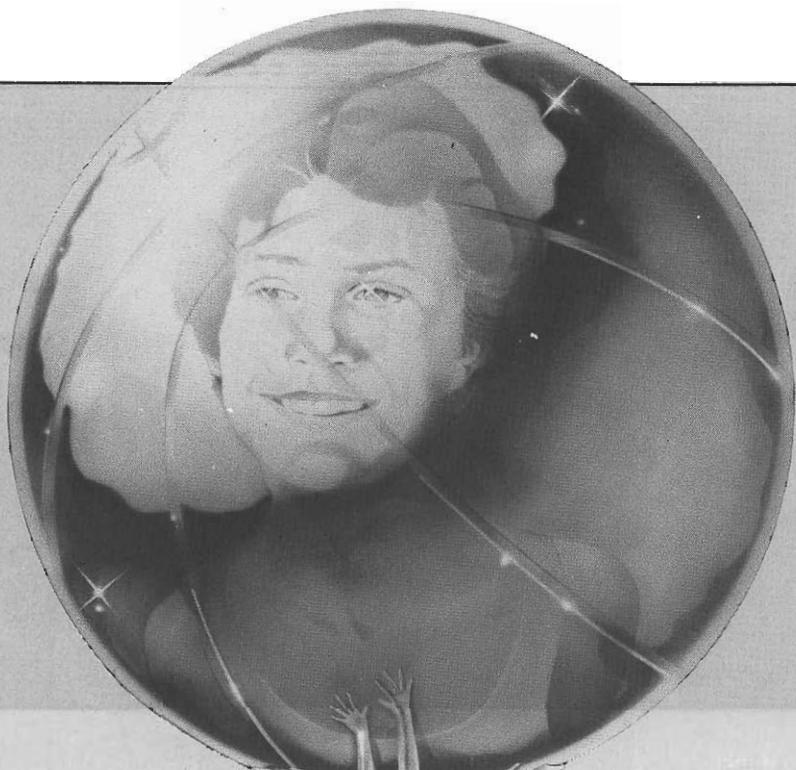
間ドアに手をかけて開けておいたのだった。そうして待つ人がいなくなると、長老は中へ入っていかれた。帽子を脱いだ長老は、年若い女性のせいで危うく脱いだ帽子を落とすところだった。彼女はあまり急いでいたので、ぶつかった相手がだれかも気がつかなかったほどであった。

私は少なくとも6、7分の間、モリス長老が入口を通り抜けて行く様子を見ていたと思う。他人のために通路を譲りながら、しかも「すみません」「失礼します。お先にどうぞ」と声をかけて通って行く。突進してくる人々のために、まったく立往生ということも幾度かあった。はち合わせになれば、相手が道を譲ってくれるか、長老が待っていることも気づかないで通り過ぎてし

まうかするまで、じっと待っているに違いない。

ホテルの玄関にいた人々が、モリス長老以上に多忙な予定やわずらい事を抱えているとは決して思えない。それ以来私は、主の使徒のために道を譲る方が（少なくとも間違いなく）、だれにとっても妥当ではないかと考えている。

謙遜を真に表わすもの、すなわち親切、他人への思いやり、人々の目的や必要に気づくこと、これらは繁雑な日常で忘れられることが多い。ホテルの入口でのあの謙遜さを目にして以来、どんな小さな親切でも、それを示してくれた人に前より一層の感謝をすることにしている。



勝利



キース・エドワーズ



15歳のピリーは体が不自由なうえに学習能力にも障害があって、私たちの定員会からほとんど忘れられていた。バプテスマを受ける必要もなかった。学校も特殊学校に通っていたし、体が不自由ではスカウト活動も現実味を帯びなかった。新しい教師定員会アドバイザーが召されたのは、そんな折だった。「ピリーを名簿に登録するのなら、少なくとも活動に参加させる必要があると思うのですが。新しいアドバイザーのウィルソン兄弟が初めての電話でそう話すと、驚くべき答えが返ってきた。ピリーは確かに出席するというのである。「今までだれも聞いてみようと思ひしなかったようです。」お母さんが申し訳なさそうに言った。

春から夏への数カ月、ピリーはミューチュアルの活動にすべて出席し、私たちも彼のことがようやくわかってきた。彼はみんなの仲間になりたいと思っていたのだった。ピリーのことをよく理解できなくて、不器用な点に文句を言ったり、厄介者扱いする少年たちもいたが、ピリーは自分が必要とされていると感じていたし、アドバイザーが自分を愛していることも感じ取っていた。

ピリーが16歳になって祭司のグループに移ると、再び忘れられた存在になった。しかし残った仲間たちが誕生日を迎えて祭司になると、またピリーのことを思い出し、活動に引っ張り出すようになった。まわりを取り囲む私たちに、ピリーは一層の愛を感じていた。

バレーボールのシーズンがやってきた。私たちのチームはステーキ部でも最強とい

う自負があった。ここ2年というもの、ステーキ部競技会でもう少しで優勝というところにあり、今年こそ優勝と思っていた。ベテランの年長組の少年たちがいて、調子も上々、才能にも恵まれていた。さらに、チームのマスコットのピリーもいた。ピリーにもプレーをさせたのである。できるのはボールを打つことだけだったが、だれもがピリーに拍手を送って励まし、ピリーも自分が一役買っていることを実感していた。試合ごとにチームの一員としての意識が強まっていた。シーズン中にピリーのために得点を落としたり、試合に負けたりすることがあっても、ピリーはプレーを続け、私たちも払った犠牲に気持ちを良くしていたのだった。

ついにステーキ部選手権がやってきた。決勝戦に勝ち残ったのは過去2年間と同じチームだった。今年こそ優勝できそうだった。相手チームにはシーズン中の試合で勝っていたからである。

土曜日の午後、試合時刻が来たのだが選手が何人かコートに姿を現わさない。自信過剰から、油断して飲み物を買いに行ってしまったのだ。最初のセットは彼ら抜きで始まったが、控えの選手の奮闘で大接戦となった。しかし敵のチームも練習量が豊富で、結局は第1セットを落としてしまった。これで、3セットのうち2セットをとるために、次のセットはベストメンバーで臨み、是が非でも勝たなければならなかった。

ピリーは最初のセットの間ずっとコーチの横にいて、「今度は僕の番？もう出てもいい？」としつこく言っていた。コーチはきっぱりとしかもやさしく言った。「ピリー、

自分の席に戻って座っていなさい。出るときがきたら声をかけるから。」

第1セットの終わり頃には、ピリーはもうじっとしていらなくなっていた。彼にとってスコアは問題ではない。大事なことはプレーをすることだけだった。コーチはピリーを見つめた。しばらくの間ためらっていた。このコーチは、すべての少年にプレーさせるのが常だったからである。その方針を変えるべきだろうか。それとも、試合よりも原則の方が大切なのだろうか。

今年こそ勝たなければならぬ年だった。そんなとき、しかも次第に敗色が濃くなっていくときに、普通のコーチならピリーを出すだろうか。

私たちのグループは特異な存在だった。スポーツのコーチならいつかは私たちのようなグループの面倒をみるべきであると、わずかに数週間前にコーチ自身が語っていた。私たちにも福音の原則が理解できるはずだと考えたからである。選択の余地はなかった。よし、ピリーを出そう。

相手のチームはピリーを目がけてサーブしてきた。次のサーブも、その次のサーブもピリーが標的だった。何度もピリーのところへサーブが来た。相手のコーチがタイムをとってサーバーに何かを話しかけた。今度のサーブもピリー目がけてだった。得点は11対0、1本もまともにレシーブできなかったのである。そのあとサーブがネッ

トにかかったが、もう遅かった。最終得点は15対6だった。こうして、今年こそ勝つはずだった私たちは、負けてしまった。

相手チームが首をうなだれてコートを出て行った。私たちは涙を流すまいと懸命だった。なぜこんなことになったのかわからなかったのである。外に出るとコーチが語りかけてきた。「私には何が正しいかわかっているつもりだ。」努めて冷静になろうとしている風だった。「全員がプレーすることが大切だと思う。だからいつも全員にプレーさせてきた。私は、自分で正しいことをしてきたと思っているよ。」監督もピリーとともにそこにいた。そして何か言いたそうだったが、何と言ってよいのかわからなかった。ピリーが沈黙を破ってこう言った。「次の試合は勝つよ。」

大きな変化が起こったのはそれからだった。日曜日の神権会で監督が「勝利」というテーマでレッスンをしたのだが、その中のひとつの話が皆を奮い立たせた。体の不自由な息子を抱えた不活発な父親が、息子が私たちの定員会から愛されているのを見て、神殿に行こうとしているのである。もちろん、ピリーの父親のことだ。監督は、それこそが本当の勝利であると語った。するとだれかが、バレーボールができるなら、ピリーは神権会にも来られるはずだと言った。こうして、ピリーは本当に私たちの仲間になったのである。私たちはバレーボールの優勝を捨ててピリーにかけた。それほど彼は大切な存在となったのである。

バスケットボールのシーズンがやってきた。今ではだれもがピリーのことを知っていた。ピリーがプレーすることも知ってい

た。審判も、ビリーがボールを持ったかどうか、よく心得ていた。どのチームも少しのことは大目に見てくれたのである。彼は確かに仲間だった。

ステーキ部競技会の季節が再び巡ってきた。ステーキ部内のチームと戦って勝ち進み、最終戦はバレーボールのときと同じチームとの対戦となった。前半は接戦だった。ところが、後半が始まるとたんにガタガタになってしまった。コーチには事の成り行きがわかっていた。そして第3クォーターが終わる頃になると、もう挽回の可能性は皆無だった。ところがバレーボールで負けた相手に何か仕返しする手はないものかと考えていると、コート上では実におもしろいことが起こっていた。

ビリーがプレーをしていた。実際のところ彼はボールをシュートできなかった。片方の手足が萎縮していて、ボールを思ったところへ投げることができないのだ。ところがビリーがボールを取るたびに、相手のコーチが声をかけて、反則プレーをさせている。私はまったく何がなんだかわからなかった。集まっていた人も耳を疑ったに違いない。どうして監督は笑っているのだろうか。相手の選手がビリーをそっとたたいた。審判の笛が鳴った。それはだれにも、私にもわかった。ビリーに、ファウルに対するシュートのチャンスが与えられた。故意のファウルなのでシュートは2回だが、2回とも失敗してしまった。ところがシュートのときに相手チームの選手がラインクロスをしていたので、ビリーはもう一度フリースローをしなければならなかった。

観衆はビリーに拍手を送って声援した。

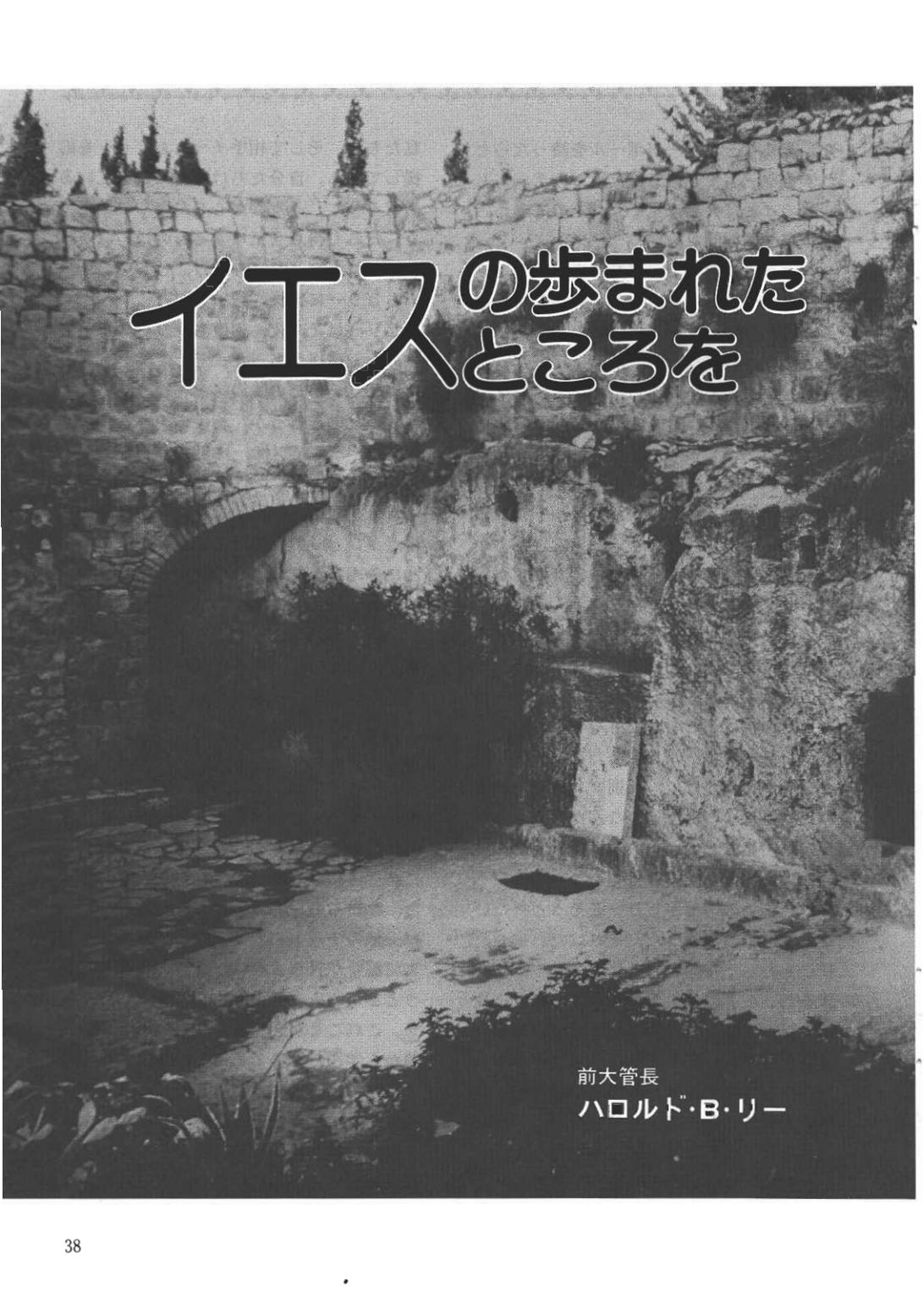
私たちが、そして相手チームもビリーを応援している。自分たちは本当に負けているのだろうか。みんなが心をひとつにしていた。だれも得点を気にするものはいなかった。だれもがビリーを助け、どちらのチームもビリーに声援を送っていた。

ビリーはその夜、何度もフリースローを試みた。声援があった。そして笑いもあった。ビリーはその晩のスターだった。だれが勝ったのだろうか。相手のチームが、私たちが、そしてステーキ部が勝利を得たのだ。

自分を捨て、利己的な目標を忘れたとき、得点がひとり人間ほどに重要ではないことにみんなが気づいたのだ。私たちは皆ひとつのことに心を向けていた。相手のチームも悪い人たちではなかった。審判もまさに人間の心の通った人だった。たとえ勝てなくても、試合に負けることは世の終わりではないのだ。

その年、私たちはエキスプローラーズスカウト・オリンピックに参加して試合をした。バレーボールやバスケットボールのチーム競技に参加し、勝利と敗北の両方を味わった。そこにはビリーへの私たちの愛があった。私たちの、あるいはビリー自身の行為は、他のチームに教えるところが多かった。実に監督が言うように、勝利は「人格を養うときのみ」その意味を持つということ。これこそが、私たちがビリーという人間から学んだものであると思う。

私たちに教訓としてビリーがここにいるのだと、監督は言った。ビリーからもっと他の教訓を学ぶため、私たちは前より一層彼に近づき、注目しているところである。



イエスの歩まれた ところを

前大管長
ハロルド・B・リー



聖地を訪れたときのことを記したこの記事は、1972年、リー大管長が第一副管長の召しにあったときに書かれたものである。リー大管長は、1972年7月からこの世を去った1973年12月まで、大管長を務めた。

圖の墓

栄 えある3日間に、私たちは聖なる場所を歩き、この世に生を受けた者の中で最も偉大な方、生ける神の御子キリストなるイエスのみ力を感じることができました。

私たちは、聖地に向かいながら一緒に四福音書を読みました。そしてホテルの部屋を出るたびに、私たちは、史跡についてのガイドの説明に対して主が私たちの耳をふさがれるようにと祈りました。それは私たちが霊的な気持ちにもっと敏感になることにより、耳からではなく心でその聖なる場所を知るためでした。

その聖地で私は初めて「私は歩いた、イエスの歩まれたところを」というあの美しい聖なる言葉をしみじみと味わえたように思います。城壁をめぐるエルサレムの町から、ユダヤの丘にあるベツレヘムの町までは約9キロあります。そこを、優秀なガイドつきのレンタカーに揺られながら、私たちは再びあの美しいクリスマスの讚美歌を聞く思いがしました。

ああ、ベツレヘムよ
なかひとり
星のみ^{じよ}匂いて
深くねむる^ふ
知らずや今宵^{こよひ}
くらき空に
とこしえの光
照りわたるを

(讚美歌210番)

左手のはるか向こうには、羊飼いの野が見えていました。丘の中腹には、2千年前と同じように、今も羊たちが草をはんでいます。その情景を見てみると、あの羊飼いたちの物語の意味がはっきり理解できるようでした。

「さて、この地方で羊飼たちが夜、野宿しながら羊の群れの番をしていた。すると主の御使が現れ、主の栄光が彼らをめぐり照したので、彼らは非常に恐れた。御使は言った、『恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。きょうダビデの町に、あなたがたのために救主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。』」（ルカ2：8－11）

間もなく私たちは、その羊飼いと思われの人々と一緒に、今はキリスト降誕教会の地下にある岩に掘られたほら穴の入口に行きました。ここでは、確かに聖なる場所であるという霊的確信のようなものが感じられました。地下にあるこの岩に掘られたほら穴は、まさしくここが聖所であることを私たちに教えてくれているようでした。

ヤシの町ジェリコの向こうの、勇敢なバプテスマのヨハネが人の子にバプテスマを施したヨルダン川の岸でも、私たちは再び霊的な気持ちを経験することになりました。そこで起こった神聖な出来事は、次のように簡潔に記されています。「イエスはバプテスマを受けるとすぐ、水から上がられた。すると、見よ、天が開け、神の御霊がはどのように自分の上に下ってくるのを、ごらんになった。また天から声があつて言った、『これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。』」（マタイ3：16－17）

城壁をめぐらしたエルサレムの町を出て5キロほど車で行くと、マルタとマリヤとラザロの兄妹の家があります。ごう慢なユダヤ人の多い中で、主はここでエルサレムの門の中にいたときよりもはるかに心なごむ人々と会うことができたのです。マルタやマリヤの屋敷からさほど遠くないところ

に、石でできたラザロのお墓があります。その入口に立っていると、救い主がラザロのよみがえりの前に宣言された通りに起こったあの出来事が思い出されてきました。救い主は、ご自分の大きな使命についてマルタにこう言われました。「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。」これに対して、マルタの熱のこもった証が聞こえてくるようでした。「主よ、信じます。あなたがこの世にきたるべきキリスト、神の御子であると信じております。」（ヨハネ11：25－27）

私たちはそこで、まるでラザロのよみがえりの奇跡を見ているような思いがしました。救い主はお墓の中のをぞかれ、布にくるまれ数日間埋葬されていたラザロの姿をごらんになると、命じる口調で言われました。「ラザロよ、出てきなさい。」（ヨハネ11：43）死に対する「神の人」のみ力がおのずと明らかになったのです。

救い主が昇天されたのは、この地にある最も高い頂からでした。そばに立っていた白衣に身を包んだふたりの方は、救い主が昇天するのを見ていた群衆に向かって言いました。「ガリラヤの人たちよ、なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう。」（使徒1：11）

私たちはこのあたりの聖地を歩きながら、再びゲツセマネにやって来ました。たくさんある中でも特に霊的な場所のこのゲツセマネの園には、節だらけのオリーブの木が8本あります。キリストがひざまずかれた



オリブ山

ところは、私たちの立っていたすぐそばでした。私たちの耳には、再びあの苦痛にも似た叫びが聞こえてくるようでした。主はその言葉を、偉大な啓示として与えておられます。

「その苦しmitるや、われ神、すなわちすべての中最も大いなる者なりといえども痛苦のために身をふるわせ、あらゆる毛の孔より血を湧かせ、身と霊と両つながらを苦しめ、すなわちこの苦きさかずきより吞まずしてしりごみするも可ならんことを欲したり。」(教義と聖約19:18)そして、このように祈られました。「わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの思いのままにはなく、みこころのままになさって下さい。」(マタイ26:39)

エルサレムへの旅もそろそろ終わろうと

していました。私たちはガイドのあとについて、主が打たれ、正義を愚弄した裁きにより死刑を言い渡されたと言われている法廷を通りました。それから、はりつけの場所やキリストの聖墓へ続くと思われる十字架の道を通りました。しかし、私たちにはそれらの場所はどれも違っているとしか思えませんでした。というのも、他の所で感じたような霊的なものがそこではいっさい感じられなかったからです。使徒パウロは、はりつけに関してこのように言っははなかつたのでしょうか。「だから、イエスもまた、ご自分の血で民をきよめるために、門の外で苦難を受けられたのである。」(ヘブル13:12)

つまり、イエスはエルサレムの門の中ではなく門の外で人類の罪のために十字架にかけられ、死の苦しみを受けられたのです。

ガイドはなおも私たちに、はりつけは城壁内で行なわれたことを納得させようと懸命でした。しかし私たちがそこに見たものは、はりつけと埋葬が行なわれた場所について、ヨハネの言っていることと合わない光景でした。ヨハネはこう言っています。「イエスが十字架にかけられた所には、一つの園があり、そこにはまだれも葬られたことのない新しい墓があった。その日は、ユダヤ人の準備の日であったので、その墓が近くにあったため、イエスをそこに納めた。」(ヨハネ19：41-42)

私たちはさらに、もうひとつの場所に案内されました。そこは園になっている墓地で、同胞団教会の所有になっていました。ガイドは、あとから思いついて私たちをここへ連れて来たようでした。そして小さな息子を連れたその女性ガイドが園の中を案内してくれているとき、私たちは城壁をめぐるしたエルサレムの町の門の外に、ひとつの丘を見つけたのです。そこは、城壁の中の法廷のあった所からすぐのところでした。この園は丘のすぐそば、つまりヨハネの言っているように「丘の中」にあり、その中には明らかに裕福な人によって作られた石でできたすばらしいお墓がありました。

そこに立っていた私たちは、こここそ最も聖なる場所であるという強い印象を受けたのです。私たちはまた、そこで起こったあの劇的なシーンを見ているような気がしました。その墓は、石を転がしてふたをするようになっていたらしく、口が開いていました。そして墓の入口には、そこを横切って石を転がすための溝の跡がくっきり見えます。石は取りのけられていましたが、溝だけはまだそこに残っていました。墓をのぞいたマリヤは、主がそこにおられ

ないので出て行ってはげしく泣きました。

「しかし、マリヤは墓の外に立って泣いていた。そして泣きながら、身をかがめて墓の中をのぞくと、白い衣を着たふたりの御使が、イエスの死体のおかれていた場所に、ひとり頭の方に、ひとり足の方に、すわっているのを見た。すると、彼らはマリヤに、『女よ、なぜ泣いているのか』と言った。マリヤは彼らに言った、『だれかが、わたしの主を取り去りました。そして、どこに置いたのか、わからないのです。』そう言っていて、うしろをふり向くと、そこにイエスが立っておられるのを見た。しかし、それがイエスであることに気がつかなかった。

イエスは彼女に言われた、『わたしにさわってはいけない。わたしは、まだ父のみもとに上っていないのだから。ただ、わたしの兄弟たちの所に行き、「わたしは、わたしの父またあなたがたの父であって、わたしの神またあなたがたの神であられるかたのみもとへ上って行く」と、彼らに伝えなさい。』(ヨハネ20：11-14, 17)

その晩、ホテルのベランダから夜景をながめていると、夜空にシオン山がくっきり浮かんで見えました。ガイドは、そこにダビデ王の要塞があると話してくれました。そこは、救い主がケデロン谷へ行き、裏切り者と会って裁判にかけられ死刑を言い渡される直前に最後の晩餐ばんさんを開かれた所とされています。このシオン山またはアメリカの新エルサレム(いずれかについては当教会で聖典を研究している人々の間でも一致していません)で、主の再降臨の先触れとなる全世界の歴史の偉大なドラマが始まるのです。この劇的な出来事について、主はこのように述べておられます。

「子羊はシオンの山の上に立たん。また



ゲツセマの園

彼と共にその額に父の御名を^{しる}誌されたる十四万四千の人々共に在りと。またその声、多くの河の^{ひびき}響大いなるいかづちの響の如くにして、その響は山々を崩し谷々を埋むべし。」(教義と聖約133：18，22)

「それよりして主、その足をこの山の上に置けば山は二つに裂け、地はかなたこなたに揺れ動き、諸々の天もまた震い動かん。而して、主声を発すればその声地の極までも響きわたりて、世にある諸々の国民嘆き悲しみ、これまでわらいたる者もその愚を覚らん。

それよりユダヤ人はわれを仰ぎ見て問わん『汝の手と足にある傷は何ぞや』と。その時、彼らはわれの主なることを知らん。そはわれ彼らに向いて『この傷は、わが友の家にありて得たる傷なり。われは挙げられたる者なり。十字架につけられたるイエ

スなり。われは、すなわち神の子なり』と言えばなり。」(教義と聖約45：48—49，51—52)

翌朝、私たちはヤッファ通り沿いの岩だらけの坂道を通って、テルアビブへ、そして空港へと向かいました。途中、予言者たちの予言通り、帰還したユダヤ人たちが「砂漠をバラの花咲く地」としている様を見ることができました。

このような経験をして以来、私たちの主、救い主の使命に対する私の気持ちは、以前のようなではなくなりました。私は今までになく、特別な証し人となることの意味を自分の心にはっきりと刻み込んだのです。私は心から確信をもって申しあげます。イエスは生きておられます。イエスはまさしく神の御子であられました。この教会の中に、またこの福音の中にこそ、救いの道を見いだすことができることを証いたします。

クレアと



カバのクレアは、みじめな^き気持ちでした。きょうはジャンプのタレントショーがあるのにクレアは出られません。だって、なあんにもタレントがないんですもの。ダンスもへただし、歌^{うた}もダメです。トンボがえりもできないし、タイコもたたけません。みんなに^き聞かせるような、おもしろいお話^{はなし}も知りません。クレアは、なんにもできないカバなのです。

「あーあ」クレアは、ためいきを

つきました。「わたしに^{なに}だって、何かできることがあるはずだわ。」

クレアは^{おも}思いたって、ガゼルさんのダンス教室^{きょうしつ}に出かけました。「ダンスを^{おし}教えてくれませんか。」クレアはたのみました。

クレアはピンクのダンスシューズをはきました。それから、クルクルまわるまわり方^{かた}と、おじぎのしかたをならいました。クレアは、ゆうがに^{くうちゅう}空中にとび^あ上がりました。ところが、クレアがドシンと^{じめん}地面におりる

タレントショー

ポーラ・デボロ



と、ジャングル中^{じゆう たい}がもう大へんでした。サルは木^きからおちてくるわ、バナナはふ^{くうちゆう}ってくるわ、ネズミは空中にほうりだされるわで、みんなジャングルの大地^{だい じ}しんに文句^{もん ぐ}たらたらでした。

クレアは友^{とも}だちをおこらせたくなかったので、ダンスはやめにしました。クレアは、ゾウのヘスターさんのところへ行きました。ヘスターさんは、歌^{うた}がすごくじょうずなのです。「歌^{うた}を教^{おし}えてくれませんか。」クレア

はたのみました。

「いいですとも。」ヘスターさんは、答^{こた}えました。

「では、よく聞^きいて」といいながら、ヘスターさんはハナを高^{たか}々ともちあげて『メリーさんの子^こゾウ』を歌^{うた}いました。とってもいい声^{こゑ}でした。

「さあ、こんどはあなた^{ばん}の番^{ばん}ですよ」と、ヘスターさんはいいました。

クレアは、せいっぱい声^{こゑ}をはり上げて『メリーさんの子^こカバ』をうなりました。ジャングルのみんなは、

目をふさぎました。木の家から出てきた大へびの口ニーさんまで、何の声かと思ってちぢみ上がってしまったほどでした。

「こりゃあ、見こみがないわ」とヘスターさんはいいました。

クレアはつぎに、チンパンジーさんのところへ行きました。チンパンジーさんは、空中ブランコがじょうずなのです。「ねえ、わたしに空中ブランコを教えて。」クレアはたのみました。

「いいよ、」チンパンジーのピンボーくんは、いいました。

「でも、こういうふうには木にのぼらなくちゃあ、だめだよ。」ピンボーくんは、スルスルと木にのぼっていききました。そして、えだにつかまってスイングすると、ビューンと、クレアのところへとんできました。クレアは、ピンボーくんのあとについて、ひっして木によじのぼりました。すると、木がグーンとたわみました。「ダメだーあ！」下にいたチンパンジーさんたちは、さげびました。メリメリ、メリッ！、と木はものすごい音をたてたおれ、クレアとピンボーさんはほうり出されてしまいま

した。チンパンジーさんたちは、クレアが自分たちの上におちてこなかったので、よかったなと思いました。でも、クレアは、ぜんぜんよかったなんて思いませんでした。

「タレントショーなんか、行かないっ！」クレアは、大声でいいました。

「ねえ、ぼくが、わのうけとめ方を教えてあげるよ」とサイくんがいました。

「でも、わたしには、あなたみたいなツノがないわ。」

「そうか、わすれてた。」

「それじゃあ、ぼくがジャングルお手玉を教えてあげよう」と、マントヒヒのランディーくんがいました。

「それはいいわ。」こんどは、クレアもいいました。クレアは、大きな石を空中にほうりなげました。すると、石はランディーくんの頭におちてきました。「あいたっ！」ランディーくんは、くすりをつけに、お家へ帰っていききました。

「わたし、おもしろいお話を知ってるわよ」と、わらいハイエナさんがいました。「でも、それはわたし



がタレントショーで話すから……もうひとつおもしろいお話があるとい
いんだけどなあ。」

つぎに、トラのターラさんが、ハ
ーモニカを教^{おし}えてあげようといいま
した。でも、クレアはまちがって、
ハーモニカをのみこんでしまいました。

「だれが、タレントショーなんか
行くものですか。わたし、およぎに
行くわ。」クレアは、プリプリしてい
ました。そして昼^{ひる}の間^{あいだ}中^{じゆう}、クレア
はみずうみでおよぎまわっていまし
た。それからおよぎつかれて、水^{みず}の
中^{なか}で長い長いお昼^{ひる}ねをしました。

「クレア、ねえクレアったらあ。」
クレアは、目^めをあけました。見ると、
ジャングル中^{じゆう}の友^{とも}だちが、きしに立^た
っていました。みんな、タレントシ
ョーのふく^きを着ています。

「ねえクレア、たすけてちょうだ
い。」ガゼルさんがいいました。「わ
たしが？」クレアはきしの方^{ほう}へおよ
いでいきました。

「わたしたちこまっているのよ。
あなたがいないと、どうにもならな
いの。」ヘスターさんがいいました。

「わたしに、何^{なに}ができるっていう
の。」クレアは、ためいきをつきなが
らいいました。



「ぼくたちみんなショーに出るで
しょ。だから、見てくれる人がいな
いんだよ。だれが1とうか、きめて
くれる人がいないってわけさ。」ペン
ポーくんがせつめいしました。

「あーら、それならできるわ。」

クレアは、^{おおごえ}大声でいいました。ク
レアは、^{いちばんまえ}一番前のれつにすわって、
できるだけ^{おお}大きな^{しゅ}手をしました。
おうえんしたり、^{くち}□ぶえをふいたり、
^{あし}足をふみならしたりもしました。「い
いわあ、すてきよ！アンコール、も
っと、もっと一つ！」

ショーがおわったとき、クレアは
みんなが^{かい}10回くらいおじぎができる
ように、^{なが}長いことは^{しゅ}く手をしていま
した。「みんな、すごくよかったわ。
だれが1とうかなんて、きめられな

いわ。」クレアは、いいました。

「1とうは、クレアだよ」と、ト
ラのターラさんがいいました。

「わたし？ わたしはショーに出
なかつたわ。」クレアは、おどろいて
いいました。

「そうよ、クレアよ」と犬へびの
□ニーさんもいいました。「クレア
は、^{いま}今までで^{いちばん}一番いいおきやくさん
だったわ。」

みんなが、クレアには^{しゅ}く手を^おお
りました。クレアは、^{じょう}上ひんに、お
じぎをしました。それから、しょう
ひんにバスケットいっぱいのだも
のをもらって、^{うち}家へ^{かえ}帰りました。タ
レントショーに行^いってよかったな、
とクレアは^{おも}思いました。

天上の大会議

わたしたちの住む地球がつくられる前、わたしたちは、天のお父様やお母様の霊の子供として、とてもしあわせにくらしていました。わたしたちは、霊の世界にいるあいだに、肉体がなければ、もうこれ以上成長できないということころまで、成長していました。わたしたちは、天のお父様のようになることを証明したいと思ひ、肉体をいただくため、場へ行くときを今か今かとまっていたのです。

そこで、天のお父様は、大会議を開きました。

天のお父様は、「あなたたちのために地球をつくってあげよう。それに、一人一人に肉体をあげよう」とおっしゃいました。わたしたちは、成長できることをとてもよろこんで、お父様をたたえて歌いました。お父様はまた、わたしたちに自由意志をくだ

さるとおっしゃいました。わたしたちは、自分のしたいことを自分でえらべるのです。

「地球に生まれたり、天上での生活のことは、わすれてしまうだろう」と天のお父様は、おっしゃいました。わたしたちは地球に行つて、よいことをえらぶか、悪いことをえらぶかを、ためされるのです。わたしたちは、神様を見ることなく信仰を使つて、神様にたよることを学ばなければなりません。ためしをうけることで、わたしたちが強くなることを、お父様はごぞんじでした。また、お父様は、ご自分の経験から、正しいことをえらぶのはとても大変なこと、それでもためしを受けなければ進歩できないことも、ごぞんじでした。それから、悪いことをえらんで、天のお父様のところへ帰つてこられなくなる人がいることもごぞんじでした。

それは、お父様にとってとても悲しいことでした。お父様は、子供たちみんなをとっても愛しておられたのです。

天のお父様は、わたしたちがみな、まちがいをおかすことをごぞんじでした。そこで、救い主が必要であること、つまり進んでわたしたちの罪をあがなってくれる人が必要なことを、説明してくださいました。わたしたちの中に、まるで神様のようなひとりの霊がいました。その霊は、「わたしが救い主となって、お父様や、すべての霊の子供たちのために働きましょう」と申し出ました。その霊は、イエス様でした。イエス様は、わたしたち弟や妹をとっても愛しておられたので、「罪のあがないのために、わたしの命をささげましょう。それから、地上に行き、お父様のもとへ帰るためにしなければならないことを教えましょう」と言ってくれたのです。イエス様はご自分のことは何もお考えにならず、「お父様のみこころがなりますように。栄光がいつまでもお父様にありますように」とおっしゃいました。

ところが、神様のもうひとりの霊



の子ルシフェルが言いました。「ごらんください、わたしがここにおります。わたしをおつかわしてください。あなた様の子となりましょう。わたしは、すべての霊をあがないます。必ずそういたします。ですから、あなた様のほまれをわたしにください。」

ルシフェルはお父様の計画にそむき、お父様の子供たちをおりやりに天へつれ帰ろうとしました。それに、わたしたちの一番大切なお父様のプレゼント、つまり自分でよいことと悪いこととを選ぶ権利をとりあげようとしたのです。ルシフェルは、だれも悪いことをしないようにしようと考えました。わたしたちは、まるで人形のようになって、ルシフェル



おも
の思いのままにあやつられるのです。
そうなれば、できるかぎりよい人間
になろうと努力どりよくすることもなかった
でしょうし、天のお父様とうさまのよくなる
こともなかったでしょう。

かみさま こども なか
神様の子供たちの中には、ルシフ
エルかんがの考えさんせいに賛成するものもいまし
た。3分の1もの霊れいがルシフェルに
したが従ったのです。

てん とうさま かんが
天のお父様は、ルシフェルの考え
がうまくいかないことをごぞんじで
した。それに、ルシフェルがよくば
りで、反抗はんこうてき的だということもごぞん
じだったので、イエス様を救い主に
えらび、ルシフェルの申し出もうしをとりさ
げました。ルシフェルは、とてもお
こりました。ルシフェルとルシフェ

したが れい てん とうさま かんが
ルに従う霊たちは、天のお父様の考
えに従おうとはしませんでした。そ
して、イエス様さまたちに、けんかをし
かけました。

てん とうさま れい こ
天のお父様は、そのような霊の子
ども あい
供も愛しておりましたが、あまり
はんこうてき い
反抗的はんこうてきで言うことをきかないので、
もういっしょにいることができなく
なっていました。その子供こどもたち
は、神様かみさまの計画けいかくにそおいたので、地
じよう う にくたい う
上にじよう生まれて、肉体にくたいを受けることが
できなくなりました。その子供こどもたち
は、もう天てんからででて行くことしかで
きませんでした。

てん とうさま したが おお れい
天のお父様に従った大ぜいの霊れいた
ちは、地上ちじようでそれぞれ様々さまざまなことを
するようと言われました。もちろ
ん、だれもが自由意志じゆういしをもっている
ので、何をなにしたらよいのか、何をし
てはいけないのかをえらばなくてはな
りません。また、わたしたち一人一人
には、それぞれ特別な能力とくべつ のうりよくが与えら
れました。その能力のうりよくは、ほかの人た
ちのために使えば、もっと伸のばすこ
とができるのです。天のお父様はわ
たしたちが天のお父様てん とうさまのよくなる
ために必要なものを、全部用意ひつようして
くださったのでした。

おもちやばこ

きゅうりゅうくんだり

さあ、きしま
でぶじにつけ
るかな。いき
どまりになっ
たら、やりな
おし。



さあ、あさだ！

どこにおいてた
かな？さがして！

コップ

くし

エンピツ

シャツ

かいちゆう

でんとう

やきゆうの

ボール

ほうし

かぎ

バット

バナナ

クツ

ハブラシ

リンゴ



欠点にとらわれず 長所を見いだすには

私 たちは欠点を持った生身の人間ですから、人が何か義に反するような行ないをした場合は、その人個人ではなく、その行ないに目を向けるようにすべきことを、家族、学校、あるいは教会で教えるようにしなければなりません。

監督である私は、「我が人々」と題した小さなノートを大切にしています。このノートには、ワード部会員の問題事は一切したためてありません。

このノートには、神殿推薦状発行のための面接、年度半ばの面接のほか、ワード部会員との個人的な話し合いの際に気づいた各自の長所や目新しい事柄がぎっしり書き込まれています。

これは私にとっても貴重な資料です。例えば、80歳の未亡人のところには、彼女が断食証会を楽しみにしていること、断食と証が彼女にとって大切であり、このふたつの原則に彼女が深い理解を示していることが記されています。

この記録を記してから1年半の間に、私はこの記録を利用してお話を依頼したり、断食と証に関するレッスンの中で彼女に言葉を添えてもらったりしました。

このように、各自の長所や関心事を記録するようになってから、それぞれの短所や欠点に触れるのが何ともいやになり、各々の長所や徳がよく理解できるようになりました。

いつか現役の監督の職を解かれるとき、15年余りにわたってつづったこのよき記録は、私の

貴重な記録の一部となることでしょう。(ユタ州
ピオア、ジョン・B・フィッシュ)

●祈りは怒りをめぐい去り

私 は長い間、義母に深い恨みを抱いてきました。今の夫と結婚する前に私にしたことを、ずっと赦せずにいたのです。義母はその後活発な教会員となり、神殿で再婚し、私の夫もずっと以前に彼女を赦していましたが、私には何としてもできませんでした。

彼女に対する怒りが私の霊の成長を阻んでいることを知るにつけ、自分を変えなければと思いました。そこで、義母に恨み心や怒りを覚えるたびに私は思い直し、そっと祈るようにしたのです。それを実行してから3カ月もたたないうちに、義母に対する怒りは消え、彼女に対する否定的な考えさえ一切なくなっていました。逆に、欠点を克服し、献身的で忠実で愛にあふれた現在の彼女の姿を、素直に見ることができるようになったのです。(匿名希望)

●過去は忘れて

善 行に励むようになった人に初めて会った場合、その人の過去はそう気にならないものですが、なまじその人の過去を知っていると、なかなか気持ちか吹っ切れないものです。

かつて、子育ての方法、特に私たちの子供の取り扱い方で、私は隣人に不満を持っていました。そこで、数年間冷却期間をおいて見つめているうちに、自分自身もほめた隣人でもなければ模範でもなく、良いキリスト教徒でもなかったと思うようになりました。

そこで、今までのいきさつは白紙に戻して、隣人とうまくやっていけないものかと思い、努力してみることにしました。真新しい気持ちで隣人に接しているうちに、かつての意見の相違

は友情の礎となり、隣人も態度を変えたこともさることながら、私自身相手を心から赦せるようになりました。(ニューハンプシャー州アトキンソン、ボニー・W・スミス)

●良いことを書き留めて

私 は余白のあるカレンダーを使って、1日少なくともひとつ、もめ事の相手の良いことを書き入れる習慣をつけています。ときには、あれこれ悩み、祈りとみたまの導きに頼らなければなりません。またあるときは逆に、相手の良いことをいくつも書き出すことができます。

一番の方法は、相手を知りその人の行ないを理解すべく努力することだと思います。そうすることにより、私はうとましく思っていた人への思いやりと愛を深めることができました。

家族の中にもめ事があるときにこの方法を活用してみたところ、思いもよらない効果が生まれました。(アイダホ州ラパート、シェリル・ストラウス)

●長所を書き出す

私 は伝道に出て間もない頃、同僚のひとりに大変いやな思いをさせられました。その経験を通して、人を理解することを学びました。

冷蔵庫に残り物を入れるわけでもなく、使った食器を洗うでもなく、彼は私たちに「万年シチュー」を1日に2度食べるように命じました。2、3日おきに牛肉とニンジン、ジャガイモをつけ足すその万年シチューは、始めなく終わりのないシチューでした。「道理で彼がちよくちよく病気になるわけだ」と、私は思いました。

ある朝、彼よりも早く目覚めた私は、この問題について考え込んでいました。私は伝道部長

に言いつけたり、煩わしたりしなくなかったのです。そのとき、支部のある若い日本人の会員がこう言っていたのを思い出しました。「あなたの同僚は、すばらしい人ですね。」

最初に私の心に浮かんだのは、「あなたは彼を知らない。それに、彼と住む必要もないんだから」という思いでした。ところが、よくよく考えているうちに、なぜあの少年はあのようなことが言えるのか、もし真実なら自分でも何か彼の長所を見つけてみたい、と思い始めました。

そこで日記帳を取り出した私は、心に浮かぶままに書いてみることにしたのです。あの少年が私の同僚をすばらしいと言ったのは、彼が周辺の日本人のたれよりもポルトガル語に堪能である、という理由からのようでした。確かに真実ですので、それを書きました。

「彼はポルトガル語を上手に話すだけでなく、教えるのもうまい」と思いました。また同僚は私に、それまでどうしてもわからなかったことを物の見事に解き明かしてくれたことが何度かありました。それも書き加えました。

また支部長として、彼は教会員とよい関係を築いているようでした。その証拠に、集会のあとでは決まって彼との個人面接を望む人が列を



作って待っていたのです。あれこれ考えながら、彼の長所を書き出しているうちに、たちまち1ページが埋まってしまいました。

この作業はすばらしい効果を生みました。私の彼に対する憎悪感は消え去り、食生活に対する反感もまたたく間に消えていったのです。

それ以来私は、会社でまた家庭など他の場所でこの方法を応用し、正しい評価を心がけるようにしています。(オクラホマ州オクラホマ・シティー、ウィリアム・W・ショーテ)

●赦しの奇跡

私 をひどく傷つけた人を赦せずにもんもんとしていた折に、私は監督から、スペンサー・W・キンボール大管長の「赦しの奇跡」を読破し、聖典を読み、祈りを捧げるようにと言われました。また、ひどい言葉で友情を踏みにじった隣人に対する態度を改めるようにとも言われました。

私は、赦しの奇跡を体験したあの火曜日の台所での出来事を生涯忘れることができません。天の窓が開かれ、笑いと喜びと幸せな思いがあふれ出て、どうしようもありませんでした。また、天父の大いなる愛と、私の過ちに対する赦しを感じ取ることができたのです。私は自分が、本当に洗い清められたことを知りました。

霊の成長と幸せをむぎむぎ見過ごして、他人を赦すことができずに不幸のどん底にいることほど、ばかばかしいことはありません。(コロラド州ランジェリー、イレーン・コンディ)

●「人は変わり成長する」

今 でも私の心に残っている言葉があります。それは「私の仕立屋は私の最良の友だ。服を頼みに行くたびに寸法を測り直してくれるのだから。」

もし、私たちが皆その仕立屋のように、人は変わり成長することに気づいたならば、かつての弱点は長所に変わることでしょう。私たちは古い物差しで人を測り、その人が変わったことに目をくれないことがよくあるものです。

これは、小説においても同様です。チャールズ・ディケンズの「クリスマス・キャロル」に登場する「スクルージ」の名前を聞いたときに、最後に悔い改めた彼ではなく、「ふん、ばかな」とつぶやくけちん坊のスクルージを思い浮かべる人がどれほどいることでしょう。(カリフォルニア州シムバレー、ビビアン・ガンダーストラップ)

●「主のみ業はいまだ終わらず」

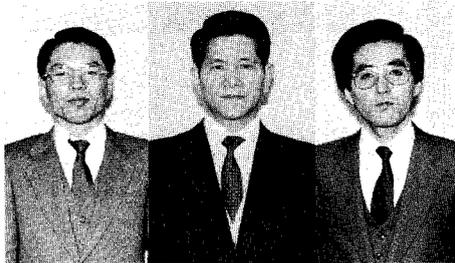
自 分の欠点や過ちを公表されたいと思う人はだれもいません。だれでも過ちを犯すものです。そしておおかたの人はできるだけ速やかに悔い改めて、人生を歩んでいきたいと願います。こうしたみずからの不完全さに目を向けることによって私たちは、他人を赦し、その欠点や過ちに対するこだわりを捨てることができるのです。

過去の欠点や過ちに固執していると、否定的な考えにとらわれ、やがてその人の心までむしばまれることになります。しかし、人の現在の長所に目を向けることにより、心は晴れやかになります。もし、否定的な思いが頭をもたげてきたら、その思いを断ち切り、良い言動に転じることが大切です。

私たちは皆完全な者となるべく成長しつづける存在であることを、銘記しなければなりません。私たちの家庭ではよくこう言っています。「忍耐せよ。主のみ業はまだ終わってはいない。」(ニューヨーク州ブークスビー、ホーリー・H・ヤング)

再組織された東京 北ステーキ部長会

新ステーキ部長に杉澤廣行兄弟
ユニットも5つの
ワード部に統合



去る2月26日、七十人第一定員会会員のウィリアム・R・ブラッドフォード長老管理のもとに開かれた東京北ステーキ部大会で、ユニットの統合化に伴い組織し直された5つの新ワード部と新監督が発表された。また長い間ステーキ部長を務めた福田真兄弟は解任され、新しくステーキ部長会が組織された。

東京北ステーキ部の新役員には次の方々が任命された。

ステーキ部長／杉澤廣行（写真中央）
第一副ステーキ部長／大石知香男（写真左）
第二副ステーキ部長／斉藤博昭（写真右）
幹部書記／児玉榮治，書記／成田弘三，書記補
／飯田弘之

祝福師／念垣郷太郎

高等評議員／天野昭，森島道朗，井上正年，福田正勝，高橋修一，山口博，的場正弘，星進，笹山裕史，根本勤，森本孝，岡田信利

新ユニット名	旧ユニット名	新監督
中野ワード部	東京第2ワード部 東京第8ワード部 豊島支部の半分	川根泰史
豊島ワード部	豊島支部の半分 板橋支部 東京北支部	伊藤秀敏
川越ワード部	川越ワード部 志木支部	吉田憲博
浦和ワード部	浦和ワード部 川口ワード部 大宮支部 (以上東京東ステーキ部から)	高井淳一
越谷ワード部	越谷ワード部 (東京東ステーキ部から)	土橋正志

*ひばりヶ丘ワード部と所沢支部は東京ステーキ部へ移行。

▶杉澤廣行ステーキ部長◀35歳。自然食品を扱う会社である「日本フォーエバーリビングプロダクツ」のマネージャー。長老定員会会長，監督，高等評議員，第一副ステーキ部長などの責任を歴任。

本格的に取り組んだ 「ベニスの商人」の公演

町田ステーキ部厚木支部

去る2月11日、町田ステーキ部厚木支部の独身成人グループが中心となり組織された劇団「ハイセム」によって、シェークスピア



●厚木支部独身成人グループを中心に結成された劇団「ハイセム」による「ベニスの商人」の公演

され、それらを十分に発揮するよい機会となった。

今回の発表を成功裡に終えるように働いてくださった厚木支部の支部長や既婚者の方々との全面的なバックアップと、はるばる遠くから駆けつけて会場を盛り上げてくださった方々に心から感謝したい。また何よりも天父のみ守りに感謝している。

今回の初めての公演に際し、神奈川新聞や朝日新聞でも記事として取りあげられ、伝道の機会とすることができたことをうれしく感じている。(レポーター：厚木支部広報担当・七田耕次)

しかし、初めから順調に事が運んだわけでは決してなかった。今年に入り、発表を1カ月後にひかえたある活動日に、ひとりの兄弟が「演劇をやめたい」と言い出した。この一言は独身成人の活動のあり方に波紋を投げかけ、以前のだらけたムードを引き締めた。毎晩練習をするようになったのはそれからである。この出来事があったから確かに独身成人の活動は変わった。それぞれ個々の生活があるにもかかわらず、自分は独身成人グループの一員であり、「ハイセム」の一部であるという自覚が生まれ、無私と一致の精神が芽生えた。あまりに大きなチャレンジを自分たちに果してしまい、成功するだろうか、本番まで間に合うだろうかとの不安が常にあったが、この一件によって「必ず成功する」と確信するようになった。

何よりも特筆すべきことは、ひとりの例外もなく、「やってよかった」と思えたことである。それは、教義と聖約の中にくたわれている「汝らひとつとなれ……」の戒めを身をもって実践できた満足感であろう。また様々な才能が発掘

「すぐここを去れ！」 —道を見つけた日—



東京北ステキ部
浦和ワード部

中西 恭子

ふ

としたきっかけで私はある宗教家の弟子として数年を過ごしていました。師は女

性ですが霊能力があり、人を見抜く力やアドバイスすることにおいては並の人には到底及ばないほどの優れた才能を持っていました。

私は霊能者のもとに通いながら自分自身を磨くために奉仕をし、正しい道を求めて一生懸命励みました。また数々の本を読みあさりました。けれども手本となる師の教えがどうにも納得がいかず、この宗教をやめた方がいいのではないかと思ったことも何度ありました。主人は私の宗教を求める心を良しと見てむしろ金銭面や自分への遠慮からならやめることはないと言って励ましてくれました。私は迷いながらも師の霊能を目のあたりにするときは不思議さと、その先行きを見届けたい好奇心も手伝ってなかなか踏んぎりがつかず、責任も持たされていたこともあり、そのままずるずると過ごしていました。

主人が昨年亡くなった後も、請われるままに住み込んで手伝っていました。そのようなとき、末日聖徒である息子が聖書とモルモン経を贈ってくれたので、忙しい合間をみては読みました。聖書とはどういうものか以前から一度読んでみたいと思っていた書物でしたので、それを手にしたときはとてもうれしく思いました。そこに書かれているキリストの言葉は私には心から納得のいくものでしたので、それ以来私は師の教えを聖書の教えといつも比較して聞くようになっていました。

日がたつにつれてだんだん本質的なことがわかるに従い、その師の教えは、神の戒めとはどうしても思えない、人に対する冒瀆^{ぼうとく}ではないかと思うようになりました。自分がずたずたに引き裂かれるほどの屈辱を受ける生活でも、それが神に向かつての「行」ならば耐えられるかもしれないませんが、あまりにも師なる人に対する尊敬も愛情も持てずに、魂が迷いと暗黒の中に引

きずられていく恐怖を静めることができませんでした。それでも耐えて心を清く、愛をわかせようと努力し、4カ月が過ぎました。もう心身ともに疲れきって骸骨^{がいこつ}のような相になり、退廃的な思いにとらわれていました。

そんな昨年8月30日、暑さと悪夢から覚めやらぬ朝、いつものように太陽の昇るとき、外気の中で私は震える胸の内を神様に祈り求めました。そのとき、今まで遠い他国の神様と思っていたはずのイエス・キリストを思い浮かべました。

「イエス・キリスト様、あなた様が本当に人間をお救いになるお方ならどうぞ教えてください。私は今まで道を求めてまいりました。そのため今愛する子供たちとも遠く離れて過ごしております。これでよいのでしょうか。それで愛する人たちのためになるのでしょうか。どうぞ教えてください。」

心から祈りました。その祈りの終わらないうちに、突然天空がバツと開けて、私の心の隅々まで明るく照らされ、澄みわたるのを感じました。「すぐここを去れ！」と心にささやくものを感じ、瞬間的に私の心は一変して喜びがわいてきました。

その日、勇躍^{ゆうやく}して末日聖徒である末息子のもとを訪れ、息子夫婦に次のように問いました。「この信仰に何か疑問を持ったことはないの？何かあるでしょう？」今思えば実に愚問でした。息子たちは即座に「そんなこと考えられない」と答え、「よかったらここにおいて宣教師のレッスンを受けてみたら」とまで言ってくれました。姉妹宣教師を紹介され、毎日続けてレッスンを受けました。そのとき私はあたかも神の国にいるかのようなごやかな雰囲気^{ふんいき}で包み込まれているのを感じました。姉妹宣教師は信念と熱意を持って、もつれた糸のような私の心から一筋

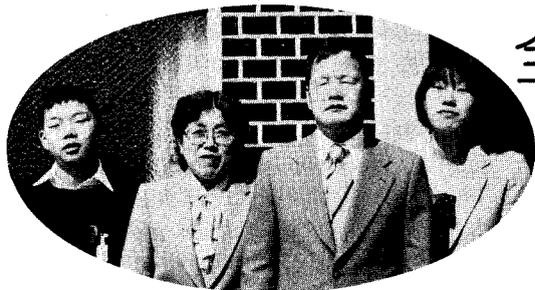
の解け口を見だし、たぐり寄せるようにしてイエス・キリストの福音へ導いてくださったのです。私の心は感謝で満ちあふればかりでした。

バプテスマを受けた9月11日は新たな自分の第二の誕生日として忘れることはないでしょう。この大きな主のみ恵みにより平安を得て生活できる喜びは、何にも代えがたいものです。周囲の人々にこの福音を伝えるための骨折りをいとわず、みこころをうかがいながら福音に添った生活をしていきたいと願っています。

追及して甲斐ない曲げられた宗教が多く発生している現代に、多くの人がその魔手につかまってしまうことの危険を避けるためにも、本当の神様の信仰を広めなくてはならないと強く感じるので。そのためには、遊びやむだな時間は

避けて福音をよく勉強し、少しでもお役に立たなくてはと焦る気持ちになります。毎日聖典を熟読し、人々に愛を伝えるよう努めたり、多くの人と友達になろうとのいろいろな思いがあり、毎日を忙しく楽しい気持ちで過ごしております。近所の方は私が若返ったと言ってくださいませ。本当に心は30年も若くなったようで、日曜日を待つ今の私です。

それにも増して、またひとつ希望があります。亡くなった主人も私が真実の道を見つけたことを喜んでいてくれるでしょうし、生きていたらともにバプテスマを受けられたでしょう。神殿に参入し、夫のために死者の贖いのバプテスマと結び固めの儀式が受けられるその日を楽しみにしています。(なかにし・やすこ 1922年生まれ)



全盲の夫とともに

— 銀婚式を迎えて —

大阪ステーキ部岡町ワード部
伊藤 好

去る2月10日、銀婚式を迎えた私たちは翌11日、12日の連休を利用し、淡路島へ一泊旅行をいたしました。11日早朝、神戸港から高速艇に乗り、エンジンの軽やかな音を聞き、静かな海のキラキラと朝日を反射させるまぶしい波を見つめながら、全盲の夫とともに過ごしてきた25年間の大波小波のあれこれを思いめぐらし、あふれるほどに頂いた主の恵みと兄弟姉妹たちの愛に心から感謝しました。

昭和32年の秋、神戸で行なわれた地方部大会

で、私は伊藤兄弟に初めて出会いました。そして翌年1月、彼は名古屋支部を訪れ、オルガンでドボルザークの「新世界」から「家路」を演奏してくれました。丁寧^{ていねい}に心を込めて弾いている彼の姿とその音色は、彼の喜び、悲しみ、苦しみをすべて表現しているように感じられ、私は生まれて初めて全身全霊を込めてその曲を聴いたのを今でもよく覚えています。

その後、彼は貧しい生活ぶりや音楽を勉強するようになったきっかけなどを私に話してくれ

ました。私はそのとき、生涯に一度だけの大決心をしたのです。「この兄弟と生活をともにして、音楽の勉強を手伝おう」と。厳しい生活を覚悟しての決心でした。私の家族や友達の強い反対にありましたが、教会の兄弟姉妹の温かい助けもあり、やっと両親の承諾を得て1年後に三宮支部で結婚式を挙げました。

「私たちは世の人の目を恐れなくて、神様の目を畏れて生活しよう。」「家族や友達から、良い結婚をしたと祝福されるまで、10年でも20年でも頑張りましょう」と、ふたりで話し合いました。

それから9年間、夫は神戸でスイングバンドのピアニストとして毎夜働きました。私も貧しい家計を助けるために、宣教師のメイド、パートタイムのお手伝いさん、洋裁の下請け、印刷の手伝いと何でもやりました。その間に生まれた長女は、粉ミルクではなく牛乳を薄めて飲ませ、育てました。それでも私たちは「健康」という大きな祝福をいただき、貧しいことは全然苦しく思いませんでした。そしてちょうど岡町支部の教会堂建築中に、これまで長い間祈り求めていた答えが与えられ、「安息日を聖く過ごすために」夫はスイングバンドの仕事をやめ、英会話を教える仕事に転職しました。

健康な方たちにとって職を変えるのは比較的簡単なことですが、全盲で、しかもマッサージや、はりの免許を持たない夫にとって、ピアノを離れての仕事はとても不安でした。建築中で忙しい岡町の兄弟姉妹が、私たちのために大変骨折ってくださり、英会話の生徒になって月謝をくださったときは、涙がとまりませんでした。

それから今日まで、私たちは英会話や中学生に勉強を教える仕事などをふたりでしています。その間に、ふたり目の子供にも恵まれ、その息子もこの5月には神権を受けられる年齢にまで成長しました。

ハワイの神殿に参入して、家族の結び固めを受けることもできました。また夫はピアノの仕事を離れてからも勉強を続け、あちこちの伝道部やステーキ部、またワード部や支部が主催してくださるコンサートで、度々演奏させていただきました。大勢の兄弟姉妹がチケットを売ったり、会場の準備をしてくださるなどのご苦勞をいとわず、夫の演奏を喜んでくださるとき、私は主の豊かな恵みに畏れを抱くほどの感謝で胸が満ちます。

結婚するまで、私は身近に目の不自由な人と接したこともなく、またボランティア活動にも参加したことはありませんでした。夫は生まれたときから、明暗もわからない世界で過ごしてきた人でした。お互いに理解し合うための本当に苦しい思い出もたくさんあります。私たちがともに生活した25年間で苦しかったことは、貧しい生活でもなければ、周囲の人々の私たちに接する態度でもなく、ふたりが真に理解し、信頼し合うことの困難さだったと思っております。

夫婦が理解し合い、助け合って生活するためには、どちらか一方が犠牲を払えばよいというものではありません。お互いに相手の思いを理解しようとする謙遜さと思いやり、相手を喜ばせようとする知恵、自分を理解してもらうための説得と忍耐、そして義しい判断をするためによく祈ることが必要だと思います。

私たちはよく話し合い、理解し合う努力を続けてくれたことを、夫に深く感謝しています。私のような思慮の浅い、欠点の多い者が現在の幸せな生活をいただくことができたのは、アルマ書第32章にある貧しいゾーラム人と同じで、境遇からやむを得ず謙遜になれたからかもしれません。たくさんの試練に耐えるために助けてくれた夫に心から感謝しております。

夫婦は一方的に相手を助けてあげるボランテ

ィアではありません。夫を助けるつもりで結婚した私が、結果的には夫に助けられてここまでこれたことを考えると、主の偉大な温かいお計らいに感謝の気持ちで一杯です。

かつてキンボール大管長が、十二使徒定員会会長として岡町ワード部へ来られたとき、夫に

「あなたは音楽を通して、伝道をしなさい」と言われました。

夫は結婚当初から変わらず安息日の礼拝行事で、心を込めてオルガンを弾かせていただいています。私は彼のオルガン演奏によって、改宗したひとりかも知りません。(いとう・よし56歳、岡町ワード部初等協会第一副会長)



プロテスタント教会 からの改宗

—「モルモン経には生き生きとした
日記のような新鮮さがある」—

岡山ステーキ部岡山ワード部 佐々木 正博

私は21年前、高校2年生のときに友達に誘われて仙台のバプテスト教会に行きました。それが私とキリスト教会との最初の出会でした。

建設業に就職したので、たびたび転勤があり、札幌をはじめ北海道の各地をまわり、万博の日本政府館の工事のため大阪にも行きました。その間、勤務地に近い各地のプロテスタント教会を転々としてきました。

教会に通い始めて7年後、大阪の吹田市にあるメソジスト教会でバプテスマを受けました。それから水島、福山、玉野、岡山と転勤し、ホーリネストの岡山聖心教会で永倉義雄牧師に10年お仕えしました。この教会で結婚し子供も与えられましたが、2年前、姉の主人が牧師として独立し、教会を設立したので籍をそちらに移しました。

3年前に家を建てるとき、今まで転勤が多か

ったので、この岡山を定住の地として与えてくださるよう祈りました。家の近くの教会を捜したところ、勤務先の会社で以前建築を請け負った末日聖徒イエス・キリスト教会があり、電話をして礼拝に出席させてもらいました。プロテスタント教会ではモルモン教を異端視していることを十分承知していましたが、内容も聞かされていましたが、私の信仰生活20年の節目にあって比較宗教学に関心を持つようになり、他の教会にも興味を持つようになっていたことが私にとって結果的に幸いしました。

多くの宣教師の方々の導きを得、レッスンの中頃ミッチェル長老からバプテスマの勧めを受けました。私は「モルモン経」に目が開かれたところだったので、すぐ返事をしたいところでしたが、妻にはまったく聞き入れられないものであったため、そのときは保留にしました。しかし2週間後にはミッチェル長老に末日聖徒イ

エス・キリスト教会への改宗の決意をお伝えしました。

「モルモン経」は文語体の部分が理解しにくいものの、生き生きとした日記のような新鮮さと、疲れたときにも頭がはっきりするような活力があるように思います。

また私を教え導いてくださったミッチェル長老には不思議な力があり、今までこのような方にお会いしたことがありませんでした。

改宗の決意をしたときにはまだ「モルモン経」を半分ぐらいしか読んでいなかったのですが、それからバプテスマの日までの1カ月弱で「モルモン経」「教義と聖約」「高価なる真珠」「福音の原則」を読み通すことができました。祈りとともにすべての備えができたのです。後日ステークキ部大会で地区代表の安芸長老のお話の中にあつた「宣教師を通して、ある力でスーツと運ばれるのです」とはこのことだと納得しました。

プロテスタント教会のクリスチャンにとって、神とその教義にはボールがかかっています。アダムの物語も神話であり、たとえ話のような感じがあるのですが、「高価なる真珠」には神の救いの計画の一環としてミカエルとも呼ばれるアダムが幸福を得るため肉体を授けられたことが生き生きと語られています。また1820年にジョセフ・スミスに与えられた神とキリストの示現や天使モロナイの訪れは感動的なところですが、「教義と聖約」には、新約聖書のキリストの言葉が懐かしくさらに詳しく書かれており、すばらしい聖典です。

私の妻は24年間プロテスタントの教会に集っており、お茶の免状を持っていて近所の方々に教えているなどの理由で、改宗には時間がかかりそうですが、知恵の言葉の戒めや食糧貯蔵、家族の祈りなどには積極的に協力してくれるので感謝しています。

これからは、時間をかけてゆっくりと妻を説得し、正しい末日聖徒の家族として神殿に参入する準備をし、永遠の結び固めができるように祈り続けていくつもりです。他の教会ではよく「モルモン教徒は熱心ではあるが、彼らには救いと永遠性がない」という声が聞かれますが、この神殿の存在こそ、それに対する明確な答えであると思います。(ささき・まさひろ、1944年生まれ、岡山ワード部日曜学校教師)

矢野兄弟(祝岡ステークキ部) 「大塩平八郎の乱」の 古文書発見で マスコミの話題に

☆…福岡ステークキ部の祝福師であり、百道中学教諭である矢野信保兄弟宅で発見された古文書が、新聞、テレビなどのマスコミで取りあげられ話題となっている。その古文書は天保8年(1837年)大阪で起きた「大塩平八郎の乱」の模様を見たまま聞いたまま記録した報告書の写し。矢野兄弟の先祖が福岡県で代々庄屋をしていたことから、事件当時久留米藩御用商人が大阪で目撃し手紙で知らせてきた事件のてん末を、先祖がまとめたものらしい。キンボール大管長を初め歴代の指導者は記録をつけることの大切さを強調してきたが、その勧告を待つまでもなく、矢野兄弟が大切に保存してきた先祖の日記文や記録から教訓や導きを得ている事例を彼のレポートから見てとることができ、記録をつける意義をより身近なものとして感じさせてくれる。

についてわずかな経歴を家に伝わる記録で知り得ていただけでしたが、これによって、今までの文字だけの先祖像に、ぐーんと血を通わせることができました。また私と先祖、信由との距離もずっと縮まり、親しみも倍加しました。

信由の子、信英についても、「慶応4年の日記」が現在まで残されているため、イメージをふくらませるのに大いに役立ちました。慶応4年といえば、途中から明治元年に変わる年で、まさに明治維新のまっただ中。久留米藩でも農民を含む鉄砲隊を新たに組織していますが、信英もその中に加わっていたのか、定期的に藩士の指導で砲術の練習をしたことを日記により知ることができます。田舎の方にも維新の影響はひしひしと押し寄せていたわけです。またこの信英については、92歳の古老よりひとつのエピソードを聞くことができました。

「村のある小作人の家に、ひとりの向学心に燃える子供がいた。あるときその子が、字を見てはたき火あとの灰の上にその字をまねて書き、覚えようとしている様子を庄屋さん（信英）が見て（その家には、すずりや筆、紙を買う余裕がなかったので）、すずりや筆、紙、手本などを

与えて、練習するように勧めた。後にその人は、寺小屋の師範代を務めるまでになり、書道の先生になった」という話です。この話も私の信英像に、血を通わせるうえで大いに役立ちました。

前記信英の子、信隆は私の祖父ですが、昭和4年に死亡したためか日記類がまったく失われていて、父もあまり生前に多くを語ってくれなかったため、イメージ化がなかなか困難です。郡会議員を務めたということを手掛りに古老にも聞きましたが、郡会議員選挙のとき、祖父の選挙事務所を手伝いに行ったときの思い出を語ってくださった方がおられたくらいで、あまり聞き出すことができず、記録の大切さを改めて痛感させられました。

一方、父信敏は旧制中学時代に、担任より日記をつけるよう勧められて以来、死の2カ月前まで日記を書き続けました。子供の頃、父の部屋の一區画に日記だけがずらりと並んでいる棚があったのを記憶しています。しかしそれらの日記類も戦後の混乱と転居のためほとんどが失われ、今も私の手元に残っているのは、私の生まれた年である昭和13年の日記1冊のみです。この日記により、私の生まれた日の家の様子や

渋谷ブックセンターからのお知らせ



●教会教育部から出版されているインスティテュート生徒用テキスト「旧約聖書」(A4変型、403頁、1,350円)が今年から一般販売できるようになりました。通常の教会書籍と同じように所定の注文用紙にてお申し込みください。なお数量に限りがありますので、お早めにご注文ください。●「教会書籍・教材総合カタログ84」に載っている「モルモンとは」のフィルムストリップは絶版となりました。●「聖徒の道」をプレゼントするときに、あなたからのメッセージを記入して送るための「聖徒の道プレゼント用書簡」(無料)の改訂版ができましたのでご利用ください。

父の気持ち、その後の私の成長に一喜一憂する家族の様子、やがて私が病気をして入院することになり、手を尽くしたにもかかわらず死を宣告されたときの深い悲しみ、そして奇跡的に助かったときの喜びが手に取るようにわかります。何度読み返してみても涙があふれ出てきて、父母への感謝の念で一杯になる日記です。

以上のように、日記、記録類は私にとって先祖と私の距離を縮め、先祖像に血を通わせ、先祖と私を結びつける強い絆となっています。私も大管長の勧めに従い、家族全員がそれぞれに日記を書いて子孫のために個人の記録や家族の記録を残すように心がけています。

大塩平八郎の乱の写本と私のことが最初に新聞で取り上げられた昨年の2月28日の夕方、6時半からテレビ西日本でもニュースとして報道されました。ふたりの大学教授と大塩の乱の文書について話している場面、ずらりと並んだ私の本棚の本や、床に積み上げられたデータなどが紹介されました。新聞、テレビの報道により、今まで音信の途絶えていた旧友や教え子から電話や手紙を県外からももらうことができたのは、大きな副産物でした。また、どこどこに大塩文書がありますよといった情報提供もいただけるようになり、研究の進展にもプラスになりました。

教会の教えに合致する「記録をつける」ことを実行していた先祖のお陰で私の名前が新聞などに出ることになり、それがまた報道関係の人と知り合うきっかけとなり、これからの伝道につながるに違いないことを思うと不思議なものを感じます。(やの・のぶやす 45歳、福岡ステーキ部祝福師)

陽だまりの中で

飛田 耕市

心をほくして 愛を感じてごらん
両手を広げて 愛を受けてごらん
ほら 愛はまるで 春の陽光
あなたの心はもう安らいている
うららかに暖かい 春の陽だまりの中で

さあ 想い出してごらん
天のみ母の温かなみ胸の中で
幼な子だったあなたは
安らいていたことを
ほら わかるでしょう
愛は変わらない やさしさだつてことが

さあ 想い出してごらん
天のみ父の寛容なみこころの中で
幼な子だったあなたは
育てられたことを
ほら わかるでしょう
愛は変わらない 思いやりだつてことが

天を仰いで 心を開いてごらん
素直な心で 主に祈ってごらん
ほら 感じるでしょう
春の陽ざしのように
あなたの上に注がれている 主の愛を

(とびた・こういち 1957年生まれ、高崎ステーキ部熊谷支部)

完成した函館支部 教会堂

●種がまかれて15年の歩み

函館の地に初めて回復された福音が宣べ伝えられたのは、1969年6月です。それから約6カ月後に改宗者が生まれ、現在では登録会員も約300名を数えるまでになりました。その間約15年の歳月が流れましたが、私たちは古い民家や病院の跡などを転々とし、信仰の火をともし続けてきました。

函館は北海道でも最も古くから栄えてきた街であり、文化的遺産が多く、なかでも西部地区には、多くの立派なキリスト教会や全国的にも有名なハリスト教会などがあり、外人墓地など観光地区としても有名です。それだけに函館の市民は、新しい未知のものには拒否反応を示すことが多く、いわゆるよそ者は、受け入れ難い面を持っています。

私たちの教えが函館市民に受け入れられるには、多くの困難があったと想像するに難しくありません。しかし多くの宣教師の方々の献身的な努力によって、主の声は宣べ伝えられ、多く

の方が改宗しました。教会員が増えるにつれて移転に移転を重ね、昨年12月に待望の教会堂が新築され、昨年の「クリスマスの夕べ」は新聞紙上にも紹介されるまでになりました。

北海道の冬は長く厳しいために、教会堂にもそれに対応できるように新しい設備が施されています。例えば、礼拝堂の床下温水暖房などその一例であり、これからの教会堂新築のひとつの新しい試みとして、現在そのデータが集計されています。

函館市に隣接して、多くの市や町がありますが、それらの市町村にはまだ伝道がなされていません。私たちの教会堂の新築によって、それらの地区に福音が宣べ伝えられ、いつの日にか函館にステーク部が樹立される日を待ち望んでいます。そのためにも、私たちは祝福されて教会堂が与えられたことを心から感謝しています。

多くの方が函館で改宗され、東京方面に移っていきました。進学や就職、転勤のため去られました。私たちはこの函館の地で働かれた多くの方々の努力と犠牲とに心から感謝しております。それらの方々の働きがなかったなら、現在の函館支部はなかったことでしょう。(札幌伝道部函館支部長：古河廉一郎)

編集室から 聖徒イェス・キリスト教会

- 4月号から「おはよう」を題するシリーズを始めていますが、チャーチニュースからの抜粋のみならず、皆様の体験も併せて掲載したいと思います。「家庭」読書原欲を養うには、「酒席でのあり方について」のテーマで原稿をお寄せください。
- そのほか各地の催し物、すばらしい体験

証を持っている方を電話か葉書きて「聖徒の道」編集室へお知らせください。こちらから取り寄せるか、あるいはご郵送で原稿依頼いたします。7月号掲載分は5月10日(必着)です。投稿には必ず連絡先(電話番号)を記入してください。

- あて先：〒106 東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イェス・キリスト教会「聖徒の道」編集室 TEL03-440-2351(代表)。

札幌伝道部

函館支部教会堂

1983年12月8日完成

北海道函館市柏木町16-17

TEL 0138-56-1884

◇敷地面積：1322.330㎡

◇建築面積：269.259㎡

◇延床面積：499.569㎡



● 函館支部の教会員

「一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福してこれをさき、弟子たちに与えて言われた、『取って食べよ、これはわたしのからだである。』また杯を取り、感謝して彼らに与えて言われた、『みな、この杯から飲め。これは、罪のゆるしを得させるように、多くの人のために流すわたしの契約の血である。』」
(マタイ26：26-28)